
姫君の使い魔-Black Sword-

悠理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫君の使い魔 - Black Sword -

【Nコード】

N8285X

【作者名】

悠理

【あらすじ】

地獄のデスゲーム『ソードアート・オンライン』。その生還者である桐ヶ谷和人、またの名をキリトの次の舞台は——異世界！？魔法使いが闊歩する異世界ハルケギニアに、トリステイン王女アンリエッタによって少年は召喚された。

《黒の剣士》がついにリアルに再現する！

プロローグ（前書き）

注意

この作品は『ゼロの使い魔』と『ソードアート・オンライン』のクロスオーバー作品です。

ファンフィクションやクロスオーバー等が受け付けられない、または嫌いな方は速やかに戻ることを推奨します。

そして今作は、互いの作品の世界観があまりにも違いすぎるため、今後原作との設定に矛盾が生じたり、場合によっては作者オリジナルの設定を織り込む可能性が十分にありえます。それらが無理な方も今すぐ戻りましょう。

ブログ

2024年。東京。天気は超晴れ。

俺——桐ヶ谷和人は車も人通りもない住宅地、その中を迷路のように編んでいる通路をとぼとぼと歩いてた。

額からは心なしか数滴の汗が滴り落ち、全身を包み込む圧倒的しんどさに自然と猫背になってしまう。さすがに線の細い俺でも足腰がもう限界……なんてことはないが、お天道様から浴びせられるこの日差しの前には、おそらく屈強な肉体を持つムキムキのオッサンでも思わず嘆息してしまうに違いない、とか心の中で決め付けてみる。

右手に視線を落としてみると、そこにはコンビニの袋に詰められる数本のペットボトル炭酸飲料に加え、テニスボールサイズのカツプアイスが2つ。ぶっちゃけ今すぐにでも袋から取り出し問答無用でがつついてやりたいところなのだが……いかんせん、これは妹の桐ヶ谷直葉すくはにパシ——もとい、頼まれたものだ。もしんなことしようものなら、自宅に帰った直後数が足りないとか怒鳴られ蹴られ妹様のお怒りを真っ向から受け止めなくてはならない。せめて帰宅するまでは我慢しなければ。

「……あつつい」

誰に向けるわけでもなく、今にも消えてしまいそうな掠れ声で咳きながらふと思う。今やこうやって生身の体で熱を感じ取り、全身

の毛穴から汗が湧いていることこそが現実であり当たり前なのだが、ほんの2年前はそれさえもままならなかったな、と。

『これは、ゲームであっても、遊びではない』

2022年。とある大手電子機器メーカーが『ナーヴギア』という仮想空間への接続機器を開発したことで、世界は遂に完全なるバーチャルリアリティを実現させた。俺はそのナーヴギアを使用したVRMMORPG『ソードアート・オンライン』———今やデスゲームと言われるそのベータテスターに選ばれ、正規版を購入後もその世界を満喫していた。

しかしある時、世界は一変する。ソードアートオンラインSAOのゲームマスター、茅場ヒース晶彦の手によって俺たちSAOの役10000のプレイヤーがゲームの中に閉じ込められた。曰くそれは仕様であり、この世界から抜ける方法はただ一つ。SAOの舞台となる『アインクラッド』の第百層ボスモンスターを倒しゲームクリアするのみだと。

もし仮にゲーム内で死亡することがあれば———、はたまた現実側で無理矢理ナーヴギアを外されるようなことがあれば、ナーヴギアから高出力のマイクロ波が発せられ、プレイヤーの命を奪うと———。

結果から述べれば、多くの命を奪ったそのデスゲームはクリアされ、生き残った6000のユーザーは無事現実へ帰還することに成功した。もちろん俺もその一人だ。

SAOから開放されて数ヶ月。当時14歳だった俺はいつの間にか16歳になっており、それからSAOを引き継ぐアルヴヘイムオンラインALOやGGOで色々あったのだが、今でもかのデスゲームの中であつた色様々な思い出を忘れることは出来ない。

初めて出会った友との別れ、自分と同じベータテスターだった少年の裏切りと死亡、己の慢心が災いとなり全滅させてしまった小さなギルド。

振り返れば脳裏にこびれ着くような不吉な記憶ばかり。無論それだけが思い出というわけも無く、自分を支えてくれた多くの友や最愛の人との出会いこそが俺にとって最大の思い出なのだが、それに比例して悪い思い出も次々と引つ張りあげてしまうものだ。

それらを忘れようとは思わない。いや、忘れてはいけない。だが自ら率先して思い出そうとも思わない。

しかしこうして一人ではーっとしていると、記憶の中から選ばれるものはやはりSAOでの思い出ばかりだ。

あの浮遊城で経験してきた生活と記憶は、俺の中でよほど大きいものになっているんだろう。

まあ、わざわざ言わなくても分かると思うが、今この時代は科学の最先端を歩いている。

数十年前までは不可能とまで言われていた『VR技術』の開発に成功し、今こうして額から流してる汗も、青空から降り注ぐ太陽光も、地面を踏みしめるたびに鳴る小さな足音も、紛い物ながらも再現可能。もちろんそれはリアルでの出来事ではないので現実味は皆無に等しく、だからこそさっきのような過去の反芻に陥ってしまうのだが。

しかしながら今あるこれらの科学技術が遥か高見にあるのも確か。VRMMOのネットゲーマーである俺は多くの時間を仮想空間の中で過ごしているため、人一倍現代社会の技術に圧巻させられる。

詰まる所、何が言いたいかって科学技術に包まれたようなこの時代にオカルトとか非現実的なモンは基本的に否定される。

なんてたつて信じられないから。人間の手によってバーチャル空間なんてものを作るってのに、今更それ以上なんてあるのかと。

信じられない。

そう、信じられないのだ。

だが、

「……いや、これはさすがに……」

やたらとうるさい蝉の声を背に、俺は驚愕と共に正面を見据える。
……いや、驚きというよりそれは、半ば呆れの意味も含んでいると思う。

自宅への帰り道。炭酸飲料とアイスが詰まったコンビニ袋を下げながらダラダラ歩いていたら、そいつは突然現れたのだ。

両脇を住宅の壁に挟まれ、まっすぐに伸びるコンクリートの路上、そのど真ん中で呆然と立ち尽くす俺の目の前に。

「……なんだよ、これ」

それは直径2メートル程度の、人間一人は通れそうな素っ気ない扉。

いやそもそも、扉というべきなのだろうか。引き戸も何もないそれはどちらかというと『扉の形をした穴』であり、穴の先は青白い光に包まれ先が見えない。なにもない、本当に何もなかった空間に突然、座標を切り裂くようにそいつは姿を現した。

穴から漏れるまばゆい光は外気に漏れだし、俺の周囲を強く照らしている。今は外も明るいのでそこまで大したものでもないが、もし夜間だったらいつは圧倒的存在感でこの場に君臨していただろう。

俺は思わず首を巡らして辺りを確認する。人影なし、車もなし、完全に俺一人。もし近くに誰かいたら視線だけで助けを求めようと思ったのだが、生憎その目論みは開始数歩で根絶えたっぽい。

なんだっていうんだ……。

とりあえず俺は後ろに回り込んで、これを映しているであろうホログラムの機器がないか探してみる。

しかしない。何もない。『光の穴』は後ろから見た姿もまったく同じ、扉の形をした穴から青白い光が漏れているのみ。

ならば下かと穴の下面を確認しようとしやがみ込んでみるが、光の穴は地面と垂直に密着する形で浮かび上がっているためそれを確認する術はない。無論、上空から映してるなんてことはあり得ないだろう。

つまりこいつは、何もない空間を引き裂いて突然現れたということになる。……いや、おかしいだろ。

考えてみる、今この時代は人の手によって『もう一つの世界』を作ってしまうような流れだ。科学で証明できないことは無いに等しい。今日の前にある光の穴も何らかの理屈あつて、今ここに居座っているのだろうが……生憎こんな技術は見たことも聞いたこともない。明らかに違和感の塊だ。

「見た感じホログラムは使っていないっぽいし……立体映像じゃないかなんだって言うんだ？」

ぶっちゃけた話、こんな怪物さつさと無視して妹の直葉へアイスを届けてしまえば良いのだが……というかこの事を直葉に話してまた戻ってくればいいだけなのだが……この光の穴はすでに俺の心を驚掴みにしてしまっていた。

昔からPCやサイエンスな技術に対して深い関心を持っていた俺としては、この場はどうしても『光の穴』について深く踏み込もうとしてしまう。一体この映像はどこから生まれたものなのか、興味を引かれまくっている。

「と、とりあえず、実際に触れてみなきゃ分かんないよな」

ものは試し、これが何らかの方法で生み出されている超リアルな映像なのか、それとも実際に4次元的な穴がこの空間に開いてしま

っているのか確認してみなければいつまで経っても分からないままだ。

俺は緊張の面持ちで光の穴を見据え続け、そーっと右手を伸ばしていく。

——俺は一体何を緊張しているんだ。ただの3D映像相手に……。

内心で呆れつつも、未知のものへ踏み込む緊張を解かぬまま俺は右手を伸ばし続ける。

そしてやがてその指先が光の穴に触れようとして——、

突然、視界が白に染まった。

「なっ……!？」

あまりに唐突なことに一瞬で脳がパニックに陥り、体が言うことを利かなくなる。

冷静に考えればこの減少が目の中の光の穴が原因であることは明確なのだが、もちろん俺にはそんな考えが頭に浮かぶことすらない代わりに、突然のフラッシュバックに全身の筋肉が数瞬麻痺ったような感覚を俺の神経が感じとった。

な、何が起きて……!？」

視界の白はますます広がっていく。瞼を閉じても、あまりの純白に黒の世界が照らされている。

何が起きてこんな事になっているのかは分からない。ただ一つ分かるのは、全てを照らす白が俺の視界だけでなく、腕も、足も、頭も、腰も、全てを包み込もうとしていること。

俺は成す術もなく——、《黒の剣士》でもなんでもない、ただの少年の桐ヶ谷和人にはどうすることも出来ず——、

やがて、全てが白に染まりつくした。

プロローグ 2

使い魔とやらを召喚してみよう。

そう思い立ったのは突然だった。

これといって深い理由はない。ただ、私——アンリエッタ・ド・トリステインは、名の通りトリステイン王国の王女だ。この世界に生を受けてまだ17年の、それでも尚多くの人々の上に立つ存在。

毎日毎日、多くの家臣や軍の幹部などを含む国会議で自らが率先して中心に立ち、それがなくとも日々留まることを知らない膨大な資料を纏め上げ、僅かな空き時間ですら魔法の稽古や貴族との面会に時間を割いている。もちろん私は王女の身であり女王ではないので、さらに負担のかかる責務については国王の父上が全うしているが……最近、父上は体調が悪い。何かの病気なのか、それともただ単に体調をこじらせているだけなのかは分からないが、ちよつと大声を張り上げるだけで咳き込んでしまうほどだ。娘の私としてはどうしても父の負担を減らしてやりたいと思うのが本心である。

そのため少しでも国の責務は私が請け負い、父上に休息を与えたい一身体積極的に行動する毎日が続いているのだが……、いかにせん仕事の量が多すぎて疲労が積るばかり。肉体的にも、精神的にも。

少しでも心が安らげる場所が欲しい——そう考え、至った結果が使い魔召喚であった。

本来、魔法を使えて私のような年齢の子ならばすでに使い魔の一匹ぐらい召喚していて当たり前なのだが、生憎私は王女。王国の娘

だ。言い方は悪いがそこらにいる兵士や家臣がすでに使い魔のような存在であり、そもそも使い魔を召還する必要が皆無に等しい訳である。今まで使い魔がいなかったのは、つまりそういう事。必要の無いことに無駄な時間を費やせるほど、王女の立場も楽ではないのだ。

しかしよくよく考えてみれば、使い魔召喚の儀式——いわゆる『サモン・サーヴァント』は、この世界ハルケギニアに生息する様々なモンスターから術者に適切な種族が選抜され、召喚する。そこで『コントラクト・サーヴァント』を行い契約することで主従関係が成立し、初めて成功になるという。

そして主と使い魔は多くの場合強固な信頼関係に結ばれ、互いと一緒にいるだけで普段は得られないような安堵や安らぎを得られるという。まあ実際にはサモン・サーヴァントを行って召喚してみなければ分からないのだが、ぶっちゃけ毎日の多忙で疲れきっている私にはそんな心配無用に思える。

もし仮に。あくまで仮定の話だが、自分の召喚する使い魔が竜——それも一般的に想像するような巨大な竜ではなく、猫や犬と同じようなサイズといわれるミニチュアダラゴンだったりしたら？

あの種族は非常に穏やかな性格をしているという。それだけではなく、非常に人懐っこいとか。もしそのような使い魔を召喚できたりしたら、仕事を終えて部屋に戻ったとき愛くるしい姿で迎えてくれる小さな竜——想像するだけで素晴らしいではないか。

……まあ、そんなこんな妄想やら葛藤が入り混じって、私は使い魔を召喚することを決意した。

そんなこんなで現在は自室。やたら豪華なベットや作業用の机と椅子、他にも様々な資料がしまっておりある本棚やドレス以外の衣服が収納されるクローゼットなどなど。このせまっ苦しい、だけど私に

とつてもつとも心休まる部屋で、今まさに『サモン・サーヴァント』の術を始めようとしていた。

王笏に近い形をする代々王室に伝わる杖を右手に掲げ、一度深呼吸。サモン・サーヴァントの詠唱^{ソモン}は覚えている。脳内に記憶されたそれを、正確に間違いなく読み上げる。それだけで問題ないはずだ。

——本来なら城の中庭などもつと広い場所で行うべきなのだが、あえて私はそれをやめた。もし王女である私が使い魔召喚をするなんてことが誰かに知られたりでもすれば、城中大騒ぎ。すぐにでもお人よしの枢機卿辺りが色んな人を集めて一種のイベントにでもなりかねない。

少しでも、誰一人にも自分のプライベートが知られない場所。そう考えた末に、結局は自室で行うことになった。ここならば仮に誰かにバレたとしても、たまに部屋の外で警備をしているアリエスぐらいだろう。彼女なら口は堅いので仮にバレても問題はないはず。脳内で色々と思考をめぐらせ、やがて自分のなかで一つのスイッチを切り替える。いつも魔法を使うときはそう、『魔法を行使する別の自分へと変えるのが私の癖なのだ。』

「——『我が名はアンリエッタ・ド・トリステイン。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、使い魔を召還せよ。』」

唱える中、私の足元に浮かぶ青白い光の魔法陣。

それを視界の隅でチラリと確認し、そして最後に、「サモン・サーヴァント」と小さく呟いて掲げる杖を振り下ろした。

——瞬間。

佇む私の目の前に現れる、『ゲート』と呼ばれる光の門。悠然と輝くそれはどこか美しく、宝石のように輝く光が私の部屋全体を照らし出す。

あとはこのゲートから使い魔が現れるのを待つだけ……。

私はじつと光の門を神妙な面持ちで見つめる。おそらく今頃、使い魔に選ばれたモンスターの前にはこれと同じものが現れ選択を迫っているはずだ。

このゲートの先にいるのは何か、心の中で『できるだけマフモフした奴がいい』とかちよつと祈りつつ、私は使い魔の姿が現れるのを待ち続けた。

そして――。

一分だろうか、それとも数十分はそうしていたのだろうか、短くも長くもあつた時間の末、ついに『それ』は私の前に踏み出してきた。

光のゲートから先端が飛び出してくる黒い毛。モンスターの体毛とは思えないような綺麗な毛だ。そして見えてくる肌色の皮膚。それもモンスターのような鱗は見当たらず、目立つ体毛も生えていない。やがて飛び出してきた『それ』は全貌を明らかにし、まるで転がり落ちてくるような勢いで私の足元にうつ伏せで倒れ付した。

……………って。

思わず、本当に思わず、私の脳の回転が止まる。

なんでこんなものが、なんで、いやなんで、という考えで思考がストップしてしまう。王女として色々と経験してきたつもりではいたが、これほど衝撃に受けた出来事は久しぶりだった。

二腕二足の四肢が生え、黒を基調とした素っ気無い衣服に身を包み、そこから覗く皮膚はちよつと色の薄い肌。頭部から生える綺麗な黒毛がその表情を隠すが――、

やがて、うつ伏せに倒れた『それ』はゆっくりと顔を上げ、

「…………い、たたた…………な、何なんだよ一体…………」

整った顔立ちから放たれる言葉どう聞いても人語であり――、私の目の前に召喚されてきたのは、紛れもしない『平民の少年』であった。

不器用な白いお姫様と。

不器用だけど、不器用なりの強さを持つ黒い少年。

世界を超えた二人の奇妙な出会いこそが、全ての――始まりだった。

第1話 召喚されし使い魔

「……い、たたた……な、何なんだよ一体……」

自身を包む白が醒めた先は、俺にとって見覚えのない場所だった。コンビニからの帰り道、住宅街の路上で突如現れた謎の物体α。立体映像か何かだと思って何となく触れてみたら、そいつが突然輝きだして……そこから先はあまり覚えていない。

ただ分かることは、視界が真っ白になって周りの状況が把握できなくなり、驚愕の出来事についてすっかり手荷物だったコンビニの袋をその場に落としてしまって、あとは何か見えない引力にでも引つ張られるようにどこかヘダイナミックに転げ落ちた。それだけ。

とりあえず周囲の状況を把握しようと、激しくぶつけてしまった後頭部を右手で抑えつつ俺はゆっくりと首を持ち上げた。

「……？」

思わず頭の上に疑問符が浮かんできそうな表情で固まってしまった。まず最初に瞳に写ったのは女の子だった。

俺が四つん這いの情けない格好で見上げるほんの2メートルほど先。真っ白なドレスに身を包み、肩からは紫色のマント。整ったセミショートの髪の毛と、じっとこちらに視線を落としている黒い瞳はまるでどこかのお嬢様かと思わせるような気品さを漂わせている。

それでいて見た目相応の幼さも併せ持っている目の前の少女は、まるで信じられないものでも見たような……ALOで例えると、いつも通り狩りに出掛けたら偶然超レアモンスターと遭遇してしまい、だけどレベル差ありすぎて勝てる気がしないプレイヤー的な表情で、呆然と俺の顔を凝視していた。

「え、えっと……」

自分自身に起きている事態が謎すぎて脳内がパニックに陥ってしまっ
まう。

……いや、待て、落ち着けキリト。桐ヶ谷和人。まずは状況を整理することが大切じゃないか？

身の回りで何が起こっているように、とにかく最初は自分そのものを世界に馴染ませることが大切。多くのオンラインゲームを渡り歩いてきた俺にならそう難しいことでもないだろう？

思い、俺は一旦目の前の少女から視線を外すと、周囲を視線だけで見回してみた。

見えるのはちよつと変わった部屋だった。やたら豪華に見えるベツトが壁に寄せられるよう中央に鎮座して、その脇には本棚やらクローゼットやらその他諸々。何かの作業用机だろうか、横幅の大きい木製の机には膨大な量の紙束と数冊の本、そして見慣れない形状のランプが乗っかっている。

だが、そこは問題ではない。注視すべき点は部屋全体の雰囲気だ。なんというか、極端な西洋風というか、壁の装飾から床に敷いてあるカーペットの模様、そして材質。あらゆる点でなんだか日本らしさの欠片もない部屋なのだ。思えば、多くのMMORPGではこういうタイプの部屋が非常に多かった気がする。

はて、どういう事だろうか。

脳内に多くの疑問を残したまま、このまま考え込んでいても仕方がないのでとりあえず俺は目の前の少女に向き直った。

「……えー、あの、すみません」

「ひっ!？」

俺が躊躇いがちに声を掛けると、少女は明らかに脅えてますとでも言いたげな様子で体を震えさせた。

いやあの……、なんか俺が悪者みたいに見えちゃうんだけど……。思わず体が脱力しそうになるが、ここで諦めたら駄目な気がする。とにかく用件だけでも述べなければ。

「ここ、どこです？」

「へ？ あ、っと……」

愛想笑い全開の俺に対し、少女が警戒の色を薄める様子はない。だが辛抱強く待っていたら、躊躇いがちにその小さな唇が動き始めた。

「……こ、ここは、その、トリステイン王国の——」

おずおずと言葉を紡ぐその様子は、なんだかシリカと初めて会った時のような光景と被るものがある。

しかしそこから先の少女の言葉は偶発的に止まることとなった。

ガチャ、と音を立てて突如開かれるこの部屋の扉。

そこから身を乗り出してきたのはまたも女性だった。金髪ショートの鋭い視線を持つその人は、丁寧な物腰で部屋へ踏み込むと呆然と立ち尽くす少女へ一礼。改めて正面へ向き直り、

「姫様。この後予定しているベニントン家との謁見についてですが

……」

女性の言葉が停止した。

いや、それも当たり前だと思う。相手にとって見慣れない男が四つん這いで呆けた顔をしているという俺自身にもよく分からない状況。

だけでも次の行動は予想を遥かに越えていた。言葉を切つて俺と視線を正面からぶつけた彼女は、一瞬だが目を見開くと、素早い動きで腰に手を伸ばしなにやら銀光りするものを一気に抜き払う。と同時に、驚くようなスピードで踏み込み、抜き払ったそれを俺目掛けて突きつける。

目と鼻の先に光るものを視界に捕らえ、さすがにバカ度胸の俺も背筋に寒気が走りぬけた。

「貴様ツ！ 部外の者だな！ ここで何をしている！」

鬼のような形相で俺を睨む女性——彼女に握られているそれは、どこからどう見ても『剣』だった。

M M O R P G でならレイピアという細剣に部類されるであろうそれを、彼女は今にも突き刺してやらんばかりの勢いで俺向けて突きつけている。

やばい。

何か分かんないけど非常にやばい気がする。

いやそもそもなんで本物にしか見えないような剣を持っているのか謎なのだが、そんなことはぶっちゃけどうでもいい気がする。とにかくやばい。

俺はひたすら弁解の言葉を脳内で組み立てようと必死になるが、人間こういう時に限って頭が働かないものだ。ダラダラと冷や汗を垂れ流すばかりである。

「どうした、何か言ったらどうだ！？ 姫様下がっててください。場合によってはこの不埒者を今すぐ……」

「うわぁ！？ 待った待った！ タンマ！」

早口で言葉をまくし立て、細剣を構えなおす女性を見て俺は慌て後ろに下がった。両手をブンブン振りつつ尻餅付きながらの後退はおそらく、桐ヶ谷和人にとって人生最大の間抜けな姿だったろう。だが実際、目の前の物騒な女性が素直に待ってくれるはずもない。俺が交代すると同時に一步踏み込み、その恐ろしい視線が俺の動きを完全にフォールドしてくる。

「なんだ？ 言い訳があるのか？ それともこの場を切り抜けれる正当な理由でもあるのか？ なんだ、言ってみろ！」

ひい！？ と本心から情けない声を搾り出してしまう。

どうしたんだキリト。お前はあのSAOをクリアに導いた《黒の剣士》キリトだろ。こんなヘタレでどうするよ動揺してちゃ始まらないだろいつもの気障な調子で何とかできるだろ！

とか必死に脳内で葛藤するが、目の前の物騒な刃を見やる。

……。

いや無理だろ。

「ふん、所詮なにもないのだろう。おい貴様、選べ。今すぐここで死ぬか、部屋の外で死ぬか、牢獄で飢えて死ぬか」

全部死ぬのかよ！ 選択のクソも無いな！

「——あ、ま、待ってアニエス！」

と、今にも斬りかかろうとしていた金髪の女性に、今まで呆然と突っ立っていた例の少女が慌てた様子で声をかけた。

今になって気付くが、ドレスの女の子も右手に何やら変なものを握っている。杖？ だろうか。中央に青色の宝石が輝いていることがなければ、見方によっては殴打用のメイスに見えなくもない。

一体こいつらは何なんだ。2人とも変な格好をしているし、どこぞの新興宗教か。実はあの光の穴は超新科学の転送装置で、桐ヶ谷和人は謎集団に拉致られちゃいましたとかそういうオチだけは勘弁してほしい。いやマジで。

「そ、その方は何もしていないわ。だから剣を収めて？」

「？ しかし姫様、このような平民の男、本来ならこの場にいる事さえおかしいはずです」

姫様と呼ばれる少女の言葉に、すぐさま切り返しを行う金髪女性。相対的な2人である。少女の方はなんだか俺のことを擁護してくれてる雰囲気があるが、反して金髪の女性は今すぐにでもその細剣で俺の首をはねたいらしい。子猫とライオンぐらいの差はあるね。

「姫様、どうしました？ お顔が優れないようですが……、そうですね。この者を屠るのは姫の目が届かないところで……」

「そ、そうではないのよアニエス。なんというか、その、ね……」

「姫様……？」

少女のどこか渋った態度に、剣を突きつける彼女も不審に思ったのか、レイピアの剣先が僅かだが下に落ちた。これは力が抜けた証拠である。

もしこの場がMMORPGの世界で身を包む姿も『キリト』ならば、この一瞬の隙に抜刀しつつ相手の剣を弾き、『ヴォーパルストライク』の一撃でも叩き込んでやるのだが……生憎これは現実だ。とりあえず俺は傍観を選んだ。

「え、えつと……」

「……？」

「……アニエス、今から私が言うことは全部真実です。一度しか言いませんので、聞き漏らさないよう」

「？ は、はあ」

何か躊躇いがちに顔を伏せ、よほど言い難いことなのかスラスラと言葉の出てこない少女。

しかしやがて彼女はおずおずと口を開くと、慎重に言葉を紡ぎ始めた。

「あの方は、その……単直に言うと、使い魔、です」

「……はい？」

「いやですから、えつと、『サモン・サーヴァント』をアニエスも知っていますよね？ それを行ったらなぜかモンスターではなく……人間が、ですね」

アニエスと呼ばれる女性は少女の言葉を聞いて表情を固めさせた。その顔は信じられないとも言いたげである。

ぶっちゃけ俺には何を言っているのか訳ワカメなのだが、使い魔

とかサモンなんちゃとか一体どういう事なのだろう？

「わ、私にも信じ難いのですが……本当に、その、この方がゲートから飛び出して……」

「……は、はは。姫様、冗談はやめてください。まさか人間が使い魔に選ばれるなどと、そのような事があるわけ……」

「ほ、本当なんです！ 信じてくださいアニエス！」

ガシツ、と懸命な面持ちで少女は金髪の女性の肩を掴んだ。同時に俺に突きつけられていた剣先も自然と地面に向かい、内心ホツとする。

女性の戸惑いの視線が俺の顔を貫いた。真相でも暴かんとする探偵のように俺の体の先から先までをまじまじと見つめてくる。

何となく愛想笑いを返してみた。

睨み返される。ごめんなさい。

「……あー、分かりました」

「え……？」

あまりにも必死な様子に女性は何を思ったのか、少女の言葉に嘘がないと判断したのだろう。戸惑いの表情もすぐに元の真面目な顔に戻る。

少しでも安心させるためか、ようやくその危なっかしい剣を腰の鞘へと素早く収めた。

「姫様の言葉は、信じます。何が動機かは分かりかねますが、『サモン・サーヴァント』を行ったら人間が召喚された。そうですね？」

「え、ええ……ありがとう、ア二エス」

「いえ。ですが、なぜ人間が……？」

深刻な表情でなにやら話し始める2人。完全に俺は置いてけぼりである。

そろそろ口火を切ったほうがいいか……なんにしても情報が足らなすぎるこの状況。

突然謎の光の穴が現れて、吸い込まれた先は見慣れない雰囲気の部屋に変わった服装をする女の子。そして模造の剣とは思えないブツを下げる、これまた変わった服の女性。

正直なところ俺の頭の中はもう滅茶苦茶だった。

何としてでも情報がほしい。そのためには——目の前の2人である。

彼女らが何物かは知らないが、現段階での情報源はここだけなのだ。この機会を見逃すわけにはいかない。

思い切って、俺は口を開いた。

「えっと、君達……？」

2人の会話がピタリと止まり、同時にこちらへ視線が投げかけられる。

片方は相変わらずのキツイ視線だ。恐ろしいったらありやしない。しかしここは長年のSAO幽閉生活で鍛えたクソ根性だ。2人の少女を真正面から見つめた。

「ちょっと聞きたいことが……いや、山ほどあるんだけど」

「なんだ」

無論、前に出てくるのはキツイ視線の女性だ。まるで楯にでもなるように一歩前へ踏み出してくる。

よほど警戒されているのか……むしろ警戒したいのはこっちの方
なんだけど……。

「じゃあまず一つ。ここはどこ？」

俺の質問に彼女は眉をひそめた。

「何を馬鹿なことを言っている？ 最近の一般人は頭の栓まで緩んでいるのか？」

何か物凄く馬鹿にされてるぞ。

「——ここはトリステインの王都、トリスタニア。今お前が
いる場所は、本来関係者しか立ち入ることの出来ない王家の城だ。
いくら頭の悪い平民でも外の景色を見れば分かるだろう？」

「外の景色？」

思わず問い返し、俺は自然と部屋内の窓を探した。

日光の突き刺さる両開きのガラス窓を見つけ、その奥を見つめる。
変わらない青空に、漂う白雲。日の下にあるその光景は——、

俺の両目が見開かれた。それぐらいの衝撃が、そこにはあったか
らだ。

「な、なんだよこれ!？」

駆け出し、窓に手をついて外の世界を凝視する。見える景色のほ

とんとに俺は目を奪われてしまった。

そこに――、俺の見慣れる世界はどこにもなかったのだ。

敷き詰められるように並ぶ住宅に、路上を走りぬける無数の車。そして天へとそびえたつ多くの高層ビル。それが俺の世界。

だけど、今日の前にある世界はどうだろうか？

まるでレンガのような材質で出来た様々な形を模する建築物の数々に、浅黄色の地面。その上を歩く人々は日本じゃ考えられないような変わった服装ばかりで、しかしそれが当たり前のように平然としている。煙突から灰色の煙を浮かばせるモノもあれば、路上に剥き出しの出店を出し何かを販売しているモノもあって――。

それは資料で目を通したことのある中世ヨーロッパになんだか似ている気がした。だが、そんな事はどうでもいい。

俺の頭には一つの疑問が粘り強く張り付いていた。

「どういうことだよ……どこだってんだ、ここ……」

確か金髪の女性は『トリスティン』とか言った気がする。しかし冷静に考えてみる。『トリスティン』とはなんだ？

海外にそんな名称の国はあったか？ それとも都市はあったか？ いや、ない。ないはず。少なくとも俺の記憶の中には存在しないじゃあなんだ？

ここは一体どこだっていうんだ？

俺の頭の中はもはやパニックから抜け出せずにいた。

「おい、どうした？ 突然黙り込んで」

背後から声が届くが俺の耳には入ってこない。必死に頭を回転させるだけで脳の許容範囲はとっくに一杯である。

トリスティンとは一体どこなのか——そんな国あっただろうか——
——そもそもなぜ日本の東京からこんな所に移動しているのか——
——、様々な思考が入り乱れる中、少しでも解答に近づこうと情報を整理していく。

考える……とにかく訳が分からないぞ……。

まず最初に行き着いたのは、ここがVRの仮想空間という可能性だ。

今ここにある自分の体も実はただのポリゴン体であり、トリスティンだの召喚だのという単語は全てゲーム内の用語。目の前に広がる光景も全て、システムによって制御されるもの——そう仮定すれば何となく想像はつく。

だが、どうしてもその可能性に頷くことは出来そうになかった。ご丁寧に産毛の生える自身の皮膚に、ポリゴンとは思えない超リアルな景色、空間、物質。そしてなによりHPバーの1つも表示されない世界で、これをVR空間と決め付けるのには無理があった。それは様々なMMORPGを渡り歩いてきた自分だからこそ言えることだ。そもそもいつこの仮想空間にダイブしたのか、それが説明できない時点でアウトである。

では何かのドッキリ……なんてこともないだろう。これが作り物の嘘だつていうならあまりにも完璧すぎる。背後にいる2人と、ここから見える多くの人々が全て仕掛け人だなんて、たかが俺みたいな小僧相手に大げさすぎるじゃないか。

謎だ。謎が多すぎる。

はつきり言おう。意味不明なんだ。

「……君達。もう一度確認するけど。ここはどこ？」

何度もしつこいと思われるかもしれないがこの際仕方ない。

「？ だからトリスティンの王都だと……」

「じゃあ！ そのトリスティンってのは地球のどこにあるんだ？
中南米？ 東南アジア？」

「はあ？ 貴様、なに意味の分からんこと……」

まくし立てるような俺の発言に相手は眉間を歪ませるだけ。

質問の仕方も悪いのかもしれないが、今更どうこう言ってる余裕は無いのだ。仕方なく、俺は決定打を打つことにした。

「なら質問を変える。あんた達、日本は知ってるか？ ジャパニーズだよ。それぐらい聞いたことあるだろ？」

今全世界で、日本を聞いたことの無い人なんてほとんどいないに等しい。

世界最先端のVR技術——そのさらに先頭を歩いているのは日本だというのはご存知だろう。この世で初めてその技術の開発に成功したのも我らが日本だ。そのニュースは全世界に報道され、今や歴史に残る出来事になっているのだ。目の前にいる2人のような年齢層ならば、まず知らないほうがおかしい訳である。

だが、

「何を目的聞いているか知らんが……、そんなもの見たことも聞いたこと無いぞ」

頭がぐらつときた。

本来ならばあり得ないこと——それが目の前で起きているのだ。思わずふらつきたくなるのも当たり前である。

日本を知らない。それはつまりよつぽど世間から切り離され、疎い存在……国内の都市から大きく離れた『なんたら族』とか、そう

いう部類の人ということになる。

しかし――、俺は改めて外の景色に視線を移す。

この壮大な姿が、見る先ほとんどが建造物と多くの住民で埋まっているこの光景が、世間に疎い人間の集団に見えるだろうか？ 無論、答えは否だ。むしろこの街こそが国の都市なんじゃないかと思えるほどの賑わいなのである。

「げ、解せん……」

冷や汗と共に呟いて、改めて自分の身に起きたこと脳内で整理してみる。

まず、妹の直葉に頼まれてコンビニへアイスとジュースを買いに行った。その帰り道、路上を遮るように鎮座する意味不明な光の穴と遭遇。興味と好奇心を引かれた俺はその穴の中に手をつ込んでみようとしてみて……気がついたらここに飛び出していた。

第三者が聞いたら実にバカみたいな話である。しかし実際にあったのだから仕方ない。

初見の感想としては、これじゃまるで昔よく見たアニメや漫画みたいに、なんかの不都合で自分が異世界へ転移させられたみたい

そこで、俺の思考は停止した。
い、いや。まさか……ねえ？

「貴様、さっきから理解し難いことばかりまくし立ててまたダンマリか？ 姫様に対して敬語を使わない時点で無礼だというのに……」

相手方が何か言っているが今の俺にはほとんどが右から左である。それよりも――、いやでも、そんな非現実的なこと、ありえるわけ……。

と、不意に、さっきまでずっと黙っていたドレスを着た少女が逆

に一步、俺に向けて踏み出してきた。

「姫様？」

「待つて、アニエス。おそらくこの方は突然のことに動揺しているんでしょう。召喚した私達ですら想定外の事態なんですから」

言つて少女は、じつと俺の顔を見つめてきた。その表情にさつきまでの戸惑いは見受けられない。彼女なりにもう状況を理解したのだろうか？

反射的に俺も見つめ返すと、そこにある黒い瞳があまりにも美しいことに今更ながら気付く。いや、瞳だけじゃない。彼女の顔立ち、体系、その全てが美しかった。例えるなら、そう——隣の女性が呼ぶように、本物のお姫様かと思うような。

「あなた、お名前は？」

「え？ …… あ、その。き、キリト、だけど……」

突然のことにつつかりユーザーネームを名乗ってしまったが、相手の少女はそれに何の違和感も感じることなく「キリト……」と俺の名前を一度復唱した。

「—— 良い、お名前ですね。私はアンリエッタ・ド・トリステイン。名の通りこの国の王女です」

律儀に自分の名前も名乗つて、少女——アンリエッタは一礼。彼女の言っていることはよく分からないが、なぜか俺も頭を下げなくてはならないような観念に突き動かされ、ぺこりと首から上だけを動かした。

「あなたの言いたいことは、何となくだけど分かります。自分の置かれていた状況が理解できないのですね？」

「はあ、まあ」

「……その、私もなんと説明すれば良いのか分からないのですが、お互いのことについてはゆっくりと話し合いましょう。ただ、あなたの今の状況を簡単に説明するのなら……」

そこから先の言葉は、なぜか聞いてはいけない気がした。
聞いている——もう二度と、元の世界へ戻れないような、そんな気がしたから。

でも俺は、話を逸らすことも、耳を塞ぐこともせず、ただじつと次の言葉を待つことしか出来なくて。

「『サモン・サーヴァント』……いわゆる召喚の儀式で、あなたはここに引き寄せられた。私の、『使い魔』として」

ここから、俺の世界は一変したのだ。

第2話 セカンドキスは浮気じゃない

異世界、という言葉を感じてだろうか。

俺は信じてない。信じてないといっても、もしそのような空間があるのであれば楽しいだろうなあという程度の解釈。

そもそも異世界とは何か。考え方は色々あると思う。

地球や月といった無数の惑星を内包する『宇宙』という球体の空間が実はいくつも存在しており、その先にある世界こそが異世界と考える夢物語もあれば、並行世界、並行時空——いわゆるパラレルワールドと呼ばれる『この現実とは別に、無数の現実が同じ場所に存在する』という都合の良いアイディア。それこそを異世界と定義する考え方も存在する。

どうしてもこいつも実に綺麗事で、だけど面白い概念だとは思う。

しかし、答えは『分からない』なのだ。

俺達多くの人間にとって、真実の『世界』は今ここにある現実のみ。仮に異世界があったとして、自分という存在をそこへ転移させる方法は未だ誰にも分かっていないのだ。

量子力学、宇宙論、ビックバン——どんなに難しい言葉を並べたとして、到底謎が解けるとは思えない。そこに存在する理論も理屈も、俺達みたいな小さな人間には計り知れないほどの『理由』が存在するのである。

異世界……それは簡単に述べれば『非現実の塊』。その時点で既に俺達人間とは概念がずれているのだ。

どんなに些細なことでも、『なぜそれがこうなってああなるのか』

という確かな根本的理由を見つけ出し、徹底的に証明する。人間の持つその思考が根絶やしになら無い限り、いつまで経っても『異世界』という概念を理解することはできないだろう。

なんとたつて異世界は『非現実』なのだから。

科学的な現実感にまみれた世界で、その答えを見つけ出すことは不可能だ。

故に、俺が今あるこの状況を無理に理解する必要もないのだろう。だが、

「異世界……ですか？」

相変わらずの四方八方豪華な部屋で、俺は床に、ドレスの少女——アンリエッタはベットの端に腰掛けて向かい合っていた。ちなみに金髪のキツイ視線の彼女——アニエス・シュバリエ・ド・ミランは少し離れた場所で壁に背中を預け、さつきからじつと俺の顔を凝視している。なんでも監視のつもりらしい。

俺はついさつき、自分に起こったことを嘘偽り無く目の前の少女に話したところだった。

目の前に光の穴が突然現れ、触ろうとしたらそのまま吸い込まれ、気がついたらここにいた。そしてこの世界とは違う——いわゆる異世界から来てしまったんじゃないかという推測も含めて。

淡々と話すその最中、アンリエッタはじつと俺の話を聞いていてくれた。

たまに眉をひそめたり怪訝な表情になることもあったが、突然剣を抜き払ったりガンを飛ばしてくるどっかの誰かとは大違いである。

「……信じ難いですね」

アンリエッタは小さく息を吐きつつ、人間として当たり前前の反応を返してくる。

しかし、話している俺だって信じられないんだ。今だってまだ何か別の理由があるんじゃないかと頭の隅では試行錯誤している自分がある。

だが、俺のいた世界とは別にまた別の世界——いわゆる異世界があつて、何らかの手違いで俺はこちらに送られてしまった。そう考えれば全て解決してしまうのだ。

あの中世ヨーロッパ的な街並みも、彼女達の服装も、この変わった内装の部屋も、全て。

「信じてくれ……とは言わないけど、何も知らないところからここに送られたのは確かだ。それだけは分かってくれ」

俺の言葉に、少女はあっさりと疑り深い表情を解いた。

「ええ。異世界がどうのこうのという話はよく分かりかねますが、あなたのことをこちらが呼び出したのは事実ですからね」

改めて思うが、アンリエッタという少女が話の分かる相手でよかったと思う。

もしこれがあのアニエスとかいう少女だったりしたらさらに話はややこしくなっていたんじゃないだろうか。まあ、初対面でいきなり抜刀されたんだからこう思ってしまうのは仕方ないのである。察して欲しい。

「ではキリトさん。確認しますが、確かにあなたは『光の穴』を見つけて、その気が無くともそれをくぐってしまった。……そういう

「ことですね？」

「ああ、そうなる」

俺は気兼ねなく頷く。

ちなみにアンリエッタは俺のことを『キリトさん』と呼んでいた。まあ、名前を聞かれたのが不意打ちだったのでついいつもの癖で『キリト』と名乗ってしまったのだが……別に構わないだろう。日本人形式の本名を名乗ったところで相手には変な顔をされるだけだろうし、我ながら賢明な判断だったと思う。

彼女は小さな溜息を吐いて、困りがちな様子で視線をさまよわせている。

……なにを考えているのかは知らないが、俺はもう自分の事情を全て話した。順序的に、次は決まっているだろう？

「さあ、俺は自分のことを話したよ。次はそっちが答える番だ。いいかい？」

「……そう、ですね。はい。そもそもあなたをここに呼び出してしまったのはこちらの所為——、答えられる限りのことは答えましよう」

アンリエッタの好意的な対応に俺は一度脳内で質問をまとめると、

「そうだな……じゃあまずはこの世界についてだ。トリステイン、だっけ？」

俺の問いに、しかし彼女は首を振る。

「いえ、それは私達の国の名称であり、この世界の総称については

また別に存在します」

「というと？」

「——『ハルケギニア』。それがこの世界の名前です。知らないのですか？」

無論、知らないに決まっている。

そもそも『世界』という定義に名称がある時点で驚きである。俺のいた世界では『地球』という名はあっても、それはあくまで宇宙の中にある一つの惑星の名であり、世界そのものを指す言葉とは言い難い。

ハルケギニア——そう呼ばれる異世界に、俺は呼び寄せられた。そういう事なのだろうか？

黙りこむ俺の姿勢が次を促すことだと思ってか、アンリエッタは続けて口を開いた。

「ハルケギニアは、ハルケギニア大陸を中心とし、我々トリステインを始めとした大小多くの国家が存在しています。ゲルマニア、ガリア、アルビオン、そして大陸の西方に位置するここ、トリステイン。あなたが今いるこの場所はトリステインの王都・トリスタニアであり、その王宮の中ということになります」

次々と意味の分からない固有名詞を連発されて俺の脳内が必死に活動するが、いまいち把握できない。

ただ大まかに訳せば……ハルケギニアという大陸にはいくつもの国があつて、トリステインはその1つ。さらにその中でもお偉いさんのいるような、王宮——つまりお城の中に、今俺は立っている……そういう解釈でいいのだろうか？

なるほど、それならばアニエスが出会い頭に剣を突きつけてきた

のも理解はできる。確かに見覚えのない変な男をこんな場所で見かけたら怪しく思うだろう。

だが……相変わらず現実味のない話で頭を抱えなくなってしまう。王宮だの王都だの、俺の元いた世界——それも日本では考えられないようなことだ。

と、そこまで考え、ふと新しい疑問が湧いて出てきた。

「王宮……？　ってことは、王族とかそういう特別な血筋みたいな
のがあるってこと？」

別にこれに関しては元の世界でもなかったことじゃないが。

ただ、王様だの女王様だの、そこまであからさまな上下関係は無かった。目の前の少女アンリエッタは、名を名乗った際に自分のことは王女と言った気がするが……、

「？　ええ、それがあって始めて個人の身分が決定しますから。言い方は様々ですが……そうですね、極端に別けるのであれば『平民』と『貴族』ですね」

「へえー……ちなみにあんたは？」

俺が何気なくそう尋ねると、どこから物凄い敵意を感じた気がした。

振り向くと、もしかしくなくても腰から細剣を下げるアニエスである。狼みたいな眼光でこっちを睨んでいる。怖いです。

アンリエッタはそんなアニエスに小さく苦笑しつつも、『まあまあ』とおだてるような視線を送りつつ、

「私は『貴族』……ですが、厳密に言えば『王族』です。さきほど名乗りましたが、私の名はアンリエッタ・ド・トリステイン、つま

リトリステイン王国の娘」

「え、って事はめっちゃ偉い人なのか？」

「ま、まあ、お父様やお母様ほどではありませんが……トリステインの中では多少なりとも権力を持っていますね」

へえーすげえー、とか適当に相槌を打っておく。なんかそう言われては目の前の少女に対して敬語ぐらい使ったほうが良いんじゃないかと思いかけるが、どうせ俺は別世界の人間である。そんなもの関係ないだろ。

それに俺は、そういう上下関係があまり好きじゃない。

かのデスゲーム、ソードアートオンラインSAOの中でも『軍』や『血盟騎士団』という他プレイヤーよりも偉いと思われる集団がいくつかあった。特に『軍』に関してはその行いはあまりにも度が過ぎていて、俺もあいつらの言動には何度も悩まされた経験が脳裏にこびれついているものだ。

ちなみにこの世界での俺の身分は……考えなくても分かる、『平民』なんだろうな。

その間にどれほどの差があるのかは分からないが、少なくとも大きな溝があるには違いないだろう。

しかし……ここまで幾つかの話を聞いてきて、少しずつだが身の回りが整理できてきた。

まず、ここが俺のいた世界とは完全な別世界、つまり異世界であることに間違いはないだろう。本当ならこんな馬鹿げたこと全力で否定してやりたいところなのだが、現に今日の前で起きている事態がイレギュラーすぎる。信じる信じないの前に、この場は信じるしかないのだ。

そしてこのハルケギニアと呼ばれる異世界の世界観も大雑把に把

握は出来たと思う。あくまでも大雑把だが。

ならば未だに残る解決していない疑問——それはただ一つ。

「——じゃあ、最後の質問。俺はなんでここに来たんだ？」

そう、これである。

最大のネックとなる疑問。

俺が奇妙な光の穴に触れて、そのせいでこのハルケギニアに呼ばれたのはもう分かつている。問題なのは、『なぜ呼ばれた』のか。それが解決しない限り俺は動きようがないのだ。

「なぜ、と聴かれても曖昧ですが……先ほども申した通り、『サモン・サーヴァント』でああなたが召喚されたとしか……」

またそれだ。言葉の隅々に出てくる『サモン・サーヴァント』。そいつがおそらくキーなんだろう。

「じゃ、じゃあ、言い方を変えよう。その『サモン・サーヴァント』ってのは何なんだ？　そもそも召喚ってどういうことだ？」

だが、俺の質問にまたもアンリエッタは眉をひそめた。

まるで、何を言っているのか理解しがたい、とでも言いたげな顔である。

「サモン・サーヴァントを知らない……？　魔法の使えない一般平民でも知るぐらい有名な口語魔法なのですが……」

「姫様」

と、長い間黙っていたアニエスが始めて口を挟んだ。

「その者の話を信じている訳ではありませんが、曰く異世界からの来訪者、ということでしょう？　もしかしては魔法の存在を知らないのでは？」

何を言う、俺だつて魔法つて言葉ぐらい知っている。

多くのMMORPGを経験してきた俺が……いやそもそも、そういう夢物語な名詞は小学生でも認知してるだろうに。

「ああ、なるほど。確かに私達の使う魔法を理解できていなければ、サモン・サーヴァントを知らないのも仕方ないのかもしれないね」

いやだから魔法ぐらい知って……、

……………え？ 『使う』？

「ちょ、ちょっと待て！」　俺は思わず立ち上がった。「魔法を使うってどういう事だよ、まさかここは現実世界でもそんな異能を使えるファンタジーな世界だっていうのか！？」

アンリエッタとアニエスの怪訝な視線が突き刺さる。えっ、なにその哀れむような目。

いやまさか、マジで魔法が使えますよテヘツとか言っちゃうわけ？

「何を言っているのかよく分かりませんが……貴族であれば魔法を使えるのは当然ですよ？　もちろんゲルマニアのようにお金さえあれば貴族になれる国では例外も多いですが」

「ええー……な、なら何か見せてくれよ。そしたら信じる」

俺の言葉にアンリエッタは可愛らしく首を傾げたが、「分かりま

した」と素直に言つとベツトの上に投げられていたメイス型の杖を右手に持つ。

彼女がそれを軽く振って見せると、中央にはめられた青色の宝石が小さく輝き――、

突然、野球ボールサイズの水の球体が浮かび上がってきた。

「!？」

思わず目を見張る。

さらにアンリエッタはもう一度同じように杖を振り――、次にその水は蒸発でもするように空間へと溶けていく。やがて消滅した。

「今のは水系統の魔法でも初歩中の初歩、空間上の水蒸気を液体へと逆転換させる魔法で……、どうしました？」

不思議そうに声をかけてくるアンリエッタの言葉に、しかし俺はどう反応すればいいか分からなかった。

何も無いところから水を出し、そして再び水蒸気へと戻す。その一連の動作には種も仕掛けも見受けられない。つまり今のは、完全なる魔法^{マジック}ということになる。

だがどうして？ なぜそんな事が出来る？

いや…… 答えはすでに出ているんだろう。

ここは異世界だから。俺の知る常識とはかけ離れた世界だから。仮に『魔法』なんていう馬鹿げたものが存在していたっておかしくないさ。

アルフヘイムオンライン

だけど、なんていうか、こう…… ALOなどで見てきた多くの『魔法』をこんな形で現実でも見ることになってしまつと…… なんだか、自分がどこか遠くへ行ってしまうような、そんな錯覚さえ覚えてしまう俺だった。

「キリトさん？　今ので信じられないのであれば、もう少し大きなのを使いますか……」

「い、いや、いいよ。もう信じた。ちょっと驚いていただけさ」

アンリエッタがまた杖を振ろうとするので、俺は慌ててそれを止めた。

なんかもう、段々現実離れしてきて頭が痛いぜ……。

「？　そうですか。ならば話の続きですが」

白いドレスを整えながら座りなおし、杖を再びベットのの上に投げながら彼女は正面へと向き直る。とりあえず俺もカーペットの床に座り直した。

「キリトさんは魔法を知らない、または理解が及ばないと、そういうことでしょうか？」

「ん、まあ、そうだと思う」

「ではそれを前提で話をさせていただきますが……まずこの世界には『四系統魔法』という力が存在します。始祖ブリミルが6000年前、ハルケギニアにもたらした『土』、『水』、『火』、『風』の四大系統のことを総じて言います。本来なら『虚無』という系統もあるんですが……それに関しては少し例外ですので、今は省きますね」

アンリエッタの言うそれは、ゲーム用語で言うなれば属性みたいなものだろうか？

適当に思いつつ、黙って話に耳を傾ける。

「魔法を使える者のことを、我々は『メイジ』と呼びます。メイジはどれか1つを自らの系統とし、それを専門的に学ぶことで実力を強化。それに見合った強さを『同系統の重複を含む、各系統を幾つ足せるか』によって示し『ドット』、『ライン』、『トライアングル』、『スクウェア』の4段階に別られます。ちなみに私は水系統のトライアングルメイジです」

メイジ、それつまり魔法使い。

簡単に解釈するならこういうことなんだろう。メイジの強さを示すという階位がいまいち分からないが、ようするに自分の使う魔法が強力であればあるほど強いってことだと思う。

ということは、だ。トライアングル……上から2番目である目の前のお姫様はかなりお強い魔法使いなんだろうか。」

「魔法の杖を媒体とし、自身の精神力を消費、さらに唱えた詠唱と^{スベル}空气中の魔力が回路となつて、初めて魔法が具現化します。もちろん先ほどのように詠唱を省いた短縮化の魔法もありますが、それ自体はただの技術ですので……」

「あ、いや、細かいことは良いよ。それより気になつただけど、この世界では誰でも魔法つてのは使えるもんなのか？」

いや、あくまで推測だが。

もし可能なのであれば、俺でも魔法が使えちゃったりして、元の世界では体験できないようなことが身を持ってできるんじゃないかと思つてしまった。

無論、ゲームの中でなら何度か魔法を使ったこともあるが、それはあくまでシステムが作り上げた産物でしかない。

もしそいつを生身の体で感じる事ができたら、それはさぞかし

快樂なことなんだろう。

だが、俺の考えが分かってか否か、アンリエッタは小さく首を振った。

「残念ながら誰でも、という訳にはいきません。魔法は代々貴族の家系に伝わるもの。貴族としての血が流れていなければ……つまり才能がなければ使うことはできません。加え、その有無で個人の身分、平民か貴族かが決まっていますから」

それはつまり、生まれた時点で、どの家系に生まれたかでその人の一生が決まる、ということか？

その解釈で合っているのなら……なんだか悲しいものだな。

金持ちは一生金持ちで、貧民はどれだけ努力しようと貧民のまま。人生の中には逆転も転落もなく、ただ決められた道を進み続けるだけ。

日本という裕福な世界に住んでいた俺とこの世界の人達の価値観は大きく違うのかもしれないが、それでも、『そういうの』はなんだか嫌な気がした。

「駄目だと……そう思いになりますか？」

「えっ？」

アンリエッタの言葉に、考えていることが読まれたのかと思い目を見開く。

が、次の彼女の言葉でそうでないことが分かった。

「私も自覚はしているのです。このような世界の風潮に流されてはいつまで経っても理想の国は築けないと。だからといってゲルマニアのように、金銭での身分格差も人々の間に決定的な歪が生じる」

「……」

「それを何とかしてこそ我々王族の仕事なのですが……、そう簡単に物事が運ばないのが現実ですね。——いや、このような低姿勢がそもそも駄目なのでしょう」

ふう、と肩重たげに息を吐くアンリエッタ。

見た感じ、まだ17、8歳程度の少女に、国だの何だのを背負わせるには荷が重過ぎるんだと思う。それも多くの人間の人生に関わるような事態であれば尚更のこと。

それでも真剣に悩めているこの姿勢はよほどの想いが無ければ不可能だ。

強いんだろうな……この子は。

「——話がずれてしまいましたね。そう、『サモン・サーヴァント』についてでしたか」

アンリエッタは気を取り直すように再び俺の目を真っ直ぐと見つめてきた。

まあ、俺が踏み込むべきことじゃないよな……。

とにかく今は目の前の問題を解決することが先決だ。なぜ俺は異世界に呼ばれたのか、一体何が原因なのか、俺はそれを知なければならぬ。

「話の流れでなら、それも魔法の1つなんだろう？ 使い魔だの召喚だのと言っていたことと関係があるのか？」

はい、と彼女は小さく頷くと、

「厳密には口語魔法と呼ばれ、系統魔法とはまた別のジャンルに別
けられますが……ここからが大事なことです。サモンは召喚、サー
ヴァントは召使い……つまり『使い魔の召喚』。それがサモン・サ
ーヴァントの意」

そのまんまつね。

……というツツコミは口の中で留めておく。

「大概のメイジは一人前になる際、私のような王族でない限り必ず
この儀式を行います。生涯を共にする『パートナー』として使い魔を
召喚し、それを自分の従者として従える。メイジの実力を見る際に
はまず使い魔を見る、と言うぐらいには重要なことなのです」

「ふうーん……で、それが俺とどういう関係に、」

言いかけて、気付いた。

気付いてしまった。

目の前の少女の言わんとしている事が。なぜ自分がこのような場
所に呼び出されてしまったのか。

半信半疑。だけど確かに、情報が一つ一つ繋がっていく。

「ま、まさか……」

「……本来サモン・サーヴァントで呼び出される使い魔は、術者の
系統を象徴するような動物、または幻獣が召喚されるはず。一
体どのような方法で使い魔が選ばれるのかは分かりませんが、それ
だけは変わりません。そう、そうなんです……」

言葉を紡ぐに連れて、アンリエッタの口が重たくなっているのは
気のせいではないだろう。

ああ、言いたいことは分かる。分かってしまう。でもって、分かってしまったのが憎らしい。

そうつまり。俺の思ったことが正しければ――、

「私のちよつとした気まぐれでサモン・サーヴァントを唱えたら、その……あなたが、召喚されちゃいまして……」

……本日何度目か、俺は本気で頭を抱えなくなった。てゆうかもう抱えている。

異世界に召喚される時点でもう馬鹿げてるつてのに、その役割が使い魔だって？ しかも人間が召喚されるという普通じゃあり得ない壁を掻い潜って、俺は見事に召喚されてしまったわけだ。意味が分からない。

「申し訳ありません……。私もこんなつもりではなかったのですが、まさか人間が召喚されるとは思わなくて……」

「い、いや……」

一国の姫様に頭を下げられているという今の状況を、もしただの一般市民が見たらどう思うだろうか。少なくともそこにいるアニメス是不機嫌らしい。ムスツとした表情で俺のことを睨み続けている。だが、考えてくれ。そもそも俺は不可抗力だ。

俺自身何も悪くないはず。責任転嫁、イクナイ。

と、そこでふと俺は思いついた。

「そ、そうだ。こつちへ召喚する魔法があるなら、当然逆もあるんじゃないのか？ そうすれば俺も今すぐ帰れるんじゃない？」

そう、普通に考えるなら正反対の効果を持つものがあってもおか

しくないんじゃないだろうか。

例えば多くのRPGゲームで、味方の攻撃力を上昇させる魔法がある。それは同時に、敵の防御力を下げる魔法があると言っているのと同じようなものだ。味方陣地を強化するか、それとも敵の弱体化を狙うか、そのどちらかによって様々な作戦・戦術に分岐するからである。

ならば現実でもそんなものじゃないのだろうか。

「そ、それは……」

しかし目の前のアンリエッタの口が重い。

彼の疑問に答えたのは、壁に背を預けるアニエスからだった。

「そんなものがあつたらとつくのとうに行っている」

「えっ、じゃあ……」

「——はつきり言おう。ない。でなければこうして話し合いの場を設けることもないし、姫様が頭を悩ます必要性もないのだ。サモン・サーヴァントとして召喚された使い魔を、また同じ場所へ戻す魔法などこの世には存在しないはずだ」

……なんてこった。

まさしく万事休す、というやつか。現実はそんなに甘くないということだ。

突然召喚された異世界で意味不明な名詞を次々と叩き込まれ、拳の果てには帰る方法がない。それはつまり、これから一生をこっちの世界で過ごすという可能性も十二分にあることで。

そう考えると途端に寒気が出てきた。

アスナ、リーファ、シリカ、リズベット、クライン、エギル、シ

ノン——。

SAOでの事件を機に出会った多くの仲間や、長い時を経てようやく兄妹となった妹。そんなみんなともう二度と会うことが出来ない。

「……」

予想以上に辛かった。

無論、絶対に帰れないと決まったわけじゃない。魔法で帰る手段が無くとも、異世界という壁を俺が越えれた時点で確かに2つの世界はどこかで繋がりはあるはず。探せば何かが見つかるかもしれない。

だがそれで不安が拭えるかといったら、答えは否だ。

人間そんな簡単に割り切れる生き物じゃないのだ。みんなのことを思い出せば思い出すほど、胸の奥が締め付けられるような錯覚さえ覚えてしまった。

「ごめんなさい……」

「……あ、いや、別にわざとじゃないんだし」

自分を責める様に……いや、実際に責めている目の前のお姫様に、俺は軽い気慰めしか言えないことを苦に思う。そう簡単に帰ることは出来ない——、その事実を知った途端まるで自分が自分じゃないかのような感覚だった。

しかし落ち込んでいられないのも事実。

俺はどうするべきなんだろうか……。

「……その、さ。キミが気に病むことじゃないから落ち込まないでくれ。この話は今は脇へ置いてこつ」

「ですが……」

「本当に大丈夫だよ。今は悩むよりも知ることが先だろ？ 使い魔だっけ？ 今の俺の立場について、詳しく教えて欲しいんだ」

正直なところ、自分が何をすべきなのは自分自身にもよく分かっていなかった。

だが、少しでも気を逸らしたくて別の話を振る。今の俺にはその程度しかできることがなかった。

「……キリトさんはまだ使い魔ではありませんよ」

「え？」

アンリエッタの言葉は意外なものだった。

「サモン・サーヴァントを唱えて、それで召喚されたのが使い魔なんじゃなかったっけ？」

「それはそうですが……正確には『使い魔候補』です。これはあくまでも『候補』ですので、契約の儀である『コントラクト・サーヴァント』を行わない限りあなたが本格的な使い魔になることは決してありません。『召喚』と『契約』、その二つをまとめて使い魔召喚の儀式ですから」

……つまり俺は、まだ使い魔じゃない？

使い魔であることとそうでないことの違いがよく分からないが、どうも俺はまだ彼女の使い魔とはなっていないらしい。

「『召喚』と『契約』……つまり、今はまだ『召喚』の段階までしか来ていないってことか？」

俺の疑問にアンリエッタは小さく頷き、

「本来『サモン・サーヴァント』は召喚側の同意が無ければ成立しないもの。続く『コントラクト・サーヴァント』はすぐに済むものなのですが……あなたの場合人間ですからその条約に狂いが生じたのかもしれませんが。強い意志を持つ人間としては、召喚の儀式による本能的な同意が省かれたのでしょぅ」

アンリエッタは半信半疑なこともあつて言葉にしていけないが、俺が異世界の住人ということも歪みの原因の一つなのだろう。

このハルケギニアの人間ならば、魔法を使えない者であっても使い魔召喚の魔法ぐらいは知識として持っている、とアンリエッタは先ほど呟いていた。つまりこの世界の人間ならば、目の前に召喚のゲートが現れてもそれが何であつて何のためのものぐらいかは判別できるということ。

だが俺のように、別世界の人間だったら？ 無論、使い魔召喚の魔法なんて知る好もない。

『偶然通つてしまった』、『不可抗力での接触』……そんな偶発的な召喚でも、魔法は『同意』のサインだと受け取ってしまう。結果、俺のように別世界からの来訪者が現れる。

実に迷惑極まりないことだが、そういう事なんだろう。

「そこでキリトさん。一つ提案があります」

と、アンリエッタが改めてこちらに向き直る。自然と俺も背筋を伸ばしてしまう。

「先ほど話したとおり、あなたはまだ使い魔ではありません。召喚されたての、コントラクト・サーヴァントを行っていない使い魔未満。つまりまだ引き返すことが可能なのです」

「引き返す？」

「……契約をするか、それとも否か、ということです」

言われて、はっと気付く。

確かにそうじゃないか。俺はまだ召喚されたての使い魔未満。これから契約するかどうかは、まだ選択する余地があるということ。別にそれで元の世界に帰れるわけじゃないが、目の前にいる少女は一国の王女。彼女と使い魔契約するかどうかで随分とこれからの身の回りに違いがあるだろう。

「契約するのであれば、あなたは私の身の回りで本来ある使い魔の役目を果たしてもらうことになります。しないのであれば……もともとあなたを召喚したのはこちらの責任。必要十分な生活環境をあなたへ提供しましょう。選択権は全てあなたに委ねます」

「……」

アンリエッタが選択の答えをすべてこちらに預けてくれるのは嬉しいが、ぶっちゃけ何とも言えない条件だった。

一見したところ有力なのは後者だろう。身の回りのことについて何一つ分らないこれからのことを考えると、縛られるものが何もない、尚且つ安全な生活を送れる方が魅力的に感じる。俺だって根本的なところは平和主義なんだ、何事も無く平凡な安地を与えられれば文句の一つもない。

だが、アンリエッタの使い魔になるのも一つの選択ではある。確

かに不安材料は大量に湧いて出てくるが、相手は姫様だ。本来ならば手に入らない情報も易々耳に入れることが出来る。もしかすると元の世界へ帰る最大の近道になるかもしれない。

こういう時、いつもの、本来の俺ならばどうしただろうか。

デスゲームだろうが何だろうが惑わされず、むしろそれを受け入れ剣を振るつた“キリト”ならば――、

「どうしますか？ 難しいのであれば、一日ぐらいは答えを待ちますが……」

「いや、今決まったよ」

間髪いれず返された俺の言葉に、アンリエッタは思わずといった表情で呆ける。

あまりにも早い決断にちよつと驚いたのだろう。

「そ、そうですか？ 随分と簡単に決めますが」

「決断力の早さには自信があるから」

「は、はあ。では……どちらに？ 先に申しますが、王女として勧めるのは後者ですが……」

俺は一度息を吐き、アンリエッタを真っ直ぐと見つめると、

「ああ、そうする」

俺の短い答えに、彼女も、少し離れた場所にいるアニエスも『まあ当然だよ』みたいな表情を浮かべる。

だが俺は追うように次の言葉を口にした。

「……って言いたいところだけど、俺、持ち手が悪いときはとりあえず全部レイズする派なんだ」

「はい？」

「どうせなら全額賭けて勝負に出てみようと思ったんだよ」

生憎『黒の剣士』キリトも、現実の桐ヶ谷和人もチマチマした作業はあまり肌に合わない。

ならば答えは一つだろう？

今ある俺の最大の目的は元の世界へ帰ること。その目的へ一直線に突っ走ってこそ、本来の俺じゃないか。

「契約するよ。使い魔として」

アンリエッタやアニエスが改めて呆けた表情を浮かべた。だがさっきの感情と違うのは傍から見ても分かる。よほど驚いているんだろう。

俺だって自分で言ったことに驚きなのだ。普通なら、普通の人間としての思考なら、ここで使い魔契約に走るのはおかしいことだって自分でも理解している。

だが脳の中にあるスイッチをちよつと切り替えただけで。

剣士キリトとしての自分に引き上げただけで、それは大きく一変する。

かのデスゲーム、SAOで培われたど根性は伊達じゃないってことだ。

「えっと……」

「？ だから契約を……」

「そ、それは分かりました。 ですが、良いのですか？」

「良いって、何が？」

「……使い魔は名通り、主人の召使いです。 それ相応の立場がありますし、あなたが契約を結んだら私はその主としてそれ相応の仕事と負担を押し付けると思います。 しかも無償で見返りはありません。 言いたいことは分かりますよね？」

「——大して良い事もない、俺には得もない、なのに簡単に決めないほうが良いって？」

はい、とアンリエッタは申し訳なさそうに頷いた。
しかし言わせて貰おう。 それは見当違いだ。

「まあそうだな。 確かに悪いことのほうが格段多い。 だけどプラスが無い訳じゃない。 国の姫様なんていうお偉いさんの近くにいれば、元の世界へ帰る方法が見つかるかもしれないしさ」

「ですが、それだけで？」

「それだけだよ。 言っただろ？ 掛け金全額レイズ主義なんだ」

俺の断固たる意思に、目の前の少女が微かに溜息を漏らしたのは気のせいじゃないだろう。

彼女だつてもともと人間を召喚しようとした訳じゃない。 気まぐれでも何でも『普通の』使い魔が欲しかったのは事実。 普通じゃない俺という使い魔を召喚したことに、少なからず不快な印象を抱い

てるのは間違いないだろう。

だが、俺を召喚してしまったからにはその責任は取ってもらわなければならない。不本意であれなんであれ、この桐ヶ谷和人を傍に置かせてもらうさ。

「……分かりました。では、キリトさん。あなたと『コントラクト・サーヴァント』を行いましょう」

「お待ちください姫様！」

と、突如割って入るようにアニエスが声を張り上げた。

「分かっているのですか！？ 使い魔契約は一度行えば取り返しのつかないこと。このような得体の知れない平民相手にそれを行うなど……！」

「いいえ、いいのですアニエス。そもそも責任があるのは私の方。いくら一国の王女とはいえ、ここは彼に選択を任せるのが人間というものです」

「ですが……」

「もとよりサモン・サーヴァントを行ったのは、少しでも自分が楽をしたいがための、私個人の判断です。どうせ人間なんですから、側近が増えたと思って彼と接することにしますよ」

「そこまで言われてはアニエスも取り付く島が無いのか、やがて「分かりました……」と渋々頷く。

さて、これでようやく障害は無くなった。

あとは契約——『コントラクト・サーヴァント』とやらを行う

だけ。俺は気を取り直して口を開いた。

「じゃ、契約しようぜ。契約契約」

「随分と軽いノリですね……では、失礼して」

アンリエッタはベツトから腰を上げると、転がっていた杖を拾い上げ、正面に向き直る。つられて俺も立ち上がる。

俺の視線の先で少女は杖を眼前に構えると、その小さな唇がポツポツと動き始めた。

「——『我が名はアンリエッタ・ド・トリステイン。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ』」

紡がれる詠唱。正しい人語の呪文ということは、おそらく先ほどの魔法の話で言っていた口語魔法コモンマジックというやつか。

言葉が終わると同時、目には見えない、耳にも聞こえないが、どこからかアンリエッタの構える杖の先に『何か』が集まっていくような、そんな感覚を覚えた気がした。何かは分からない。だが、もしかすると今のが魔力の流れだったりするのだろうか。まあ俺は知る必要もないことだろう。

ぼんやり考えていると、続いて彼女はなぜか俺のほうへと歩み寄ってきた。杖は下に降ろしている。何をする気だろう。

「……このようなことを許すのは、すでに心に決めた人がいるのですが……」

やがてアンリエッタは、俺の目の前——ほんの数センチもない、目と鼻の先まで近づいてきた。

ってというか物凄く近いんですけど……一体何を……、

「勘違いしないでくださいまし。これはあくまで必要不可欠なことですから」

「？ な、何言って——」

慌てて俺は疑問の声を放とうとするが……その言葉は、シャットアウトされる事となった。

いや、無理もない。口を塞がれたら言葉が止まるのも当たり前のことだろう？

それも、突然キスなんかされたら——。

「——……！？」

目の前、それもほんの1センチ程度先に見える、頬を真っ赤に染めて瞼を閉じるアンリエッタの顔。有無を言わず接触している互いの唇。

頭の中が真っ白になった。

同時に、俺まで顔が熱くなってくる。

い、一体何が起きて……。

「——」

長かったような短かったような……数時間にも数秒にも思える口付けの末。

やがて、ゆっくりとアンリエッタの顔が離れていき、互いの顔にピントが合う程度の距離まで離れることとなった。

アンリエッタの顔は相変わらず真っ赤に染まっている。よほど恥ずかしいのか、ついさっきまでみたいに真っ直ぐとこちらを見よう

としない。

対して俺も、確認は出来ないがバカみたいに顔が赤くなっているのが分かった気がした。いやそりやお前、いくら好きでもない女の子にキスされたからって、男なら恥ずかしいに決まってるだろ！

「な、なっ、なにをいきなり——！？」

すぐにでも文句の一つでもまくし立ててやりたいところだが、その言葉まで静止させられることになる。

突如、右肩から走る刺激。

いや、刺激なんてものじゃない。それは激痛。まるで熱した鉄板に直で手を押し付けてるような、肌が焼かれるかと錯覚するほどの激痛が突如、右肩から全身へ向けて走り抜けた。

「づあ！？——ッ！？」

声にならない悲鳴。歯を食いしばり、突然の痛みにはひたすら耐える。

少しでも気を緩めたら一瞬で気が飛んでしまうんじゃないかってぐらい激しい痛み、全身から冷や汗が吹き出るのが嫌でも実感できた。

左手で右肩を抑え、全力で耐える。

やがて痛みが少しずつ和らいだ頃には、フルマラソンを終えてすぐみたいな気だるい疲労感が全身に襲い掛かった。

「はあ！ はあ……っ、な、何なんだよ……さっきから……！」

服を捲くり、痛みが走った右肩に視線を向けると、そこには見慣れない文字が浮かび上がっていた。

まるで刺青でしたような……奇怪な文字が直接肌に刻み込まれ、

まるでブラックライトのように黒く輝いている。何なんだ一体。

「それは使い魔の紋章^{ルーン}です」

俺の疑問を察したのか、アンリエッタの声が控えめに届く。
相変わらず顔は赤いが、しっかりとこちらを見つめていた。

「見たことのない形ですが……おそらくそうでしょう。その紋章が、あなたが使い魔であることの証明。使い魔の証です」

「使い魔、の証……？」

もう一度肩に浮かぶ奇妙な文字列に視線を落とす。

紋章^{ルーン}と呼ばれたそれは、すでに黒い輝きを失い、ただの奇怪な文字へと移り変わっていた。

突然のキスから相次ぐ焼き切るような激痛。そして使い魔の証である謎の紋章。さっきからホント、ふざけているとしか思えないことばかりだ……。

てゅーかキスって……アスナにバレたら全力でしばかれるぞ……。

「……キリトさん。これであなたは正式に私の使い魔です」

前へと視線を戻すと、生真面目な顔で、だけど顔の赤いお姫様。それを見てふと思った。

また、忙しくなるんだろうな、と。

「これから、よろしく願いしますね」

第3話 使い魔の役目

「なんで月が二つあんの？」

深夜。あまりの衝撃に俺は思わず言葉を漏らしていた。

アンリエッタと使い魔契約を交わしてから、時間が時間だったために俺はアニエスに別室へと案内され、そこでずっと物思いにふけていた。

何時間ほどそうしていたかは分からないが、王室のベットとは天と地の差ほどもある素っ気無いベットに腰掛け、たまに寝転がってごろごろしている内に今に至る。外も暗くなり、窓から指す月明かりによって灯りもない室内が照らされたことから、ふと夜空に視線を向けると月が二つ。そりゃあ驚きもするだろう？

暗雲に包まれる夜空に、悠然と姿を現している青と赤の双月。あまりにも怪奇な光景に頭を悩ますが、今に限ったことじゃないかとすぐに平常運転へと思考が戻る。月が二つあったところで、魔法だの使い魔だの言われた後に限っては大したことじゃないと思う。

「しかし、これじゃあやっぱり異世界なんだよな……」

思ったことをぼんやりと呟いて、ますますその現実が実感できた。月が二つあるという光景は、元ある世界ではありえないこと。今俺の瞳に映る光景そのものが、十分にここを異世界だと証明する判断材料になるだろう。

——次第に脳裏に蘇る、アンリエッタとの会話。

魔法が現実中存在するという世界、ハルケギニアに使い魔召喚で呼び出され、なんだかんだで本当に使い魔になってしまった俺。帰る手段は不明。これから先どうなるのか、行く道は真っ暗。

今日一日で色々ありすぎて脳がパンクしそうだったが、少なからずそれだけのことは俺も理解することが出来ていた。

異世界だなんて自分で言っていて恥ずかしいが、実際に今の状況がそれなのだから仕方ない。不本意だろうが何だろうが、決めたからには俺はこれから使い魔として生活していかなければならないのだろう。

ぶっちゃけたところ不安だ。いや、不安なんてものじゃない。胸が締め付けられるように俺は心のどこかで恐怖している。これから先の自分の人生に。無論アニエスから、使い魔たる俺が何をすべきなのかは大概のことはすでに聞かされているが、それはあくまで生活の一部だ。俺が元の世界へ帰れるかどうかには何一つ関連性が皆無であろう。

言えば、そう、これは孤独感だ。

デスゲームSAOに閉じ込められたあの時とどこか似ているそれは、どんな恐怖という感情よりも直接的な恐怖を本人に与えると俺は思っている。

周りには何も知らない世界が広がり、知り合いなんて誰一人としていない。その中で、やがては自分という現実さえも怪しくなってくる恐ろしい感情。SAOに閉じ込められていた時も、俺は幾度と無くその孤独感に苛まれていた時があった。

約2年間に渡る幽閉生活の末、もう二度とあの恐怖に押しつぶされそうになることはないと思っていたのだが……まさかこんな形で再び襲い来ようとは。しかも今回は、仮想のファンタジーに閉じ込められるのではなく本物ファンタジーである。はつきり言おう。馬鹿みたいだ。

まあ、その現実をいくら嫌ったところでもならないんだだけ

ど……。

現実って単語をここまで憎んだのはこの人生初めてだと思う。
明日から大変なんだろうな……。

「……」

ふと思いついて、俺はズボンのポケットの中に手をつ込んだ。
中にはゴツゴツした感触。掴み取って引っ張り出すと、それは黒いプラスチック製のボディに直径15センチ程度の小さな長方形体外枠からほんの数センチ内側には元の世界でよく見慣れた液晶の画面。

そう——、スマートフォン型の携帯電話だ。

ついさっきまで完全に頭の中から存在を忘れていたが、よくよく考えたら召喚のゲートを誤って潜った際、地面に落としてしまったのは買い物袋だけだった。よもやずっとポケットに突っ込んでいたケータイを落とすわけがない。

軽く操作して、端末をスリープ状態から解除する。暗い部屋を僅かに照らして映し出されたホーム画面の隅には、当たり前だが『圏外』の2文字。メールやら電話やら、ネットから落としてきたアプリなどのアイコンが並ぶさらに下——そこには、恋人である結城明日奈と二人で撮ったツーショットの写真が壁紙として表示されていた。

カメラ目線でにこやかに笑顔を決めるアスナと、ぎこちない様子で必死に笑顔を作ろうとしている変顔の俺。それをじっと見つめていると、どうしても頭の中はアスナのことではいつぱいになってしまふ。

俺が突然いなくなって泣いていないだろうか、ちゃんと飯を食って体力をつけているだろうか、母親とは仲良く出来ているのだろうか、妹のリーファやシリカ達のことを俺に代わってちゃんとまとめられるだろうか——。

ほんの一瞬で思考を支配する無数の心配事。

アスナに限って俺が心配するほどの失態を犯したりはしないだろうが、それで俺自身の心配を和らげられるとは言い難い。

何だかんだいって心配性な自分がこんな時は憎かった。

「アスナ……」

言葉は届かない。だけど届くと信じて、呟く。

元の世界には、友も、妹も、恋人も、多くの大切な仲間を俺は残している。だからこそ俺は、これから先気を引き締めて挑まなければならないだろう。

方法も分からない元の世界へ戻る手段を探し出し、それを実行する。意地でもこのハルケギニアから逃げ出すことこそが、俺にとって最大の目標だ。

一刻も早くアスナに会いたい……ケータイに写る写真を見た途端、改めて俺の中で決意意識が固定された。

「絶対に帰るから……待っててくれ」

……やがて、俺の意識は暗いまどろみの中に飲み込まれていった。

曰く、使い魔である俺に任せられる仕事はアンリエッタの身回りの世話らしい。

本来ある使い魔の役目は薬草の採取だったり主人の目となり耳となることだったり……なんだか突拍子も無いことを聞かされた気がするが、要約すれば『まあ色々あるんだけど、お前人間だから無理

だよな』とのこと。何か馬鹿にされている気がしてならないが、実際俺に出来ることと言ったらたかが知れてるので否定できない。

とにかくそんな訳で、無能な俺に任せられた唯一の仕事がそれ、姫様であるアンリエッタのお世話だった。

お世話、と一括りにいつても色々あるので、使い魔生活初日の俺からしてみれば何をしたいのか分からないのだが……ありがたいことに昨日の晩、アリエスから大概のことは聞かされている。まるで奴隷に命令を下すかのような蔑んだ目線で言われては、嫌でも記憶には留まるし、さすがの俺もはいはい頷くしかなかった。

で、『お世話』の詳しい内容だが。

例えばその中に、朝っぱらから彼女を目覚めさせに行くというものがある。

「おーい姫様。朝ですよー」

ノックも無しに姫の王室へ顔を出し、容赦なく室内へ足を踏み込む。

昨日俺が召喚された、ある意味見慣れた部屋の中央に鎮座する白いシーツの豪華なベット。その上にて、少女——アンリエッタ・ド・トリステインが寝巻き姿で眠りについていた。

足音を忍ばせることもなく堂々と俺は歩み寄り、彼女の顔を覗き込む。

すうすうと寝息を立てるアンリエッタは、昨日俺と使い魔契約を交わした時みたいな凜々しい表情が完全に消えうせていた。反面そこに浮かんでいるのは、年相応の可愛らしい寝顔。人間、寝顔だけは素直になると言うが存外間違いでもないのだろう。

ちよつと下へ視線を移すと、白いドレスを身にまとい背筋を伸ばしていたとは思えないようなだらしないネグリジェ姿。投げ出される綺麗な太ももや二の腕は思った以上に色香を撒き散らしており、ぶっちゃんけ年頃の少年である俺にはちよつと刺激的だった。

まあ落ち着け俺、こんなところアスナやリーファ辺りに見られたらボコボコにされるぞ……。

実際は半透明のネグリジェの下に白い下着姿があったり、ふくよかな果実が2つ並んで、ブラではないがワンピースのような下着によつて余計にそのブツが強調されていたりするのだが、その辺は鍛え上げられた自制心で何とか押さえ込んだ。

とにかく、気を取り直してアンリエッタを起こさなければ。

「なあ、朝だつて。姫様ー姫様ー」

誤つて変なところを触つてしまわないようにそーっと肩に手をかけ、小さく揺り動かす。これだけ近くで彼女の顔を見て改めて気付かされるが、やはり物凄く可愛い顔立ちをしていた。

一つ一つのパーツが綺麗で、尚且つバランスも整っている。まさしく『姫』というのに相應しい美しさである。

「……ん、ううん……」

元々寝起きは悪くない方なのか、アンリエッタはしばらくして身をよじる。今の体勢はまずいとすぐさま体を離すと、タイミングよく薄い瞼がゆっくりと持ち上がった。

未だ意識が覚醒しきっていないおぼろげな瞳で周りを見回して、無論、最終的に視線が止まるのは俺である。

感情のない目で見つめられる俺は、得意げに笑って見せるとわざとらしく頭を下げて言ってみた。

「快調快適、最高の天気パラメータな朝でございます。姫」

「……？ ……あ、」

正気の薄い瞳にも、段々と色が戻ってくる。まったく感謝して欲しいものだ。いくら使い魔だからって、一人の青少年が大事な朝の時間を削ってまでわざわざ起こしに来てやってるんだぞ？ 本当なら目覚まし時計でも使って起きればいいものを、その目覚まし時計がこの世界にはないから仕方なく赴いてやったというのに。まあ良いモノ^{おっばい}見れたから許すけど。

とかなんとか俺が脳内で馬鹿な討論を繰り広げているうちに、アンリエッタは意識がはつきりとしてくる程度には目が覚めたらしく、その顔に浮かんだ表情は——、憤怒。
えっ、なんでさ？

「きゃあああああ！ あ、あなた、何者ですか！ 朝から許可もなく王室に踏み入れ、あろうことか寝起きの私を襲おうなどと……！」

「ちよつと待てえ！ お前は何か重大な勘違いをしているぞ！ てゆーかもう忘れたのかよ！ あんたが召喚した使い魔のキリトだよ、キ・リ・ト！」

たった一日で記憶喪失とか馬鹿ですか。それとも病気ですかなんですか。

アンリエッタは俺の顔をまじまじと眺めると、やがて眉間に小さく皺を寄せ、考え込むように目を伏せる。やがて、ポツリと呟いたのを聞き逃さなかった。

「そ、そうでした……確か使い魔を召喚して……。夢じゃなかったのね」

俺だって夢が良かったよこんちくしょう。

変なところでボケかましてくれやがって……しっかりしてて、実はどこか抜けてるのかもな。

アンリエッタはわざとらしく「こほん」と咳払いをすると、僅かに頬を染めつつこちらに向き直った。

「——も、申し訳ありません。お見苦しいところを見せしてしまいました。それと、おはようございます」

「いや、別にいいけど……おはよう」

何だかんだ言ってお互い律儀に挨拶を交わす。普通の人から見たら、王女と平民の男が対等の位置で言葉を交わすシニールな光景にしか見えないんだろうな……。

見ると、アンリエッタの表情には明らかに動揺が見え隠れている。おそらく俺が朝っぱらからここにいることに疑問でも抱いているのだろ。別に言い訳を述べるつもりはないが、俺は慌てて次の言葉へと繋いだ。

「昨日の晩にアニエスから頼まれたんだ。使い魔なんだから主の雑用係ぐらいは全うしろーって」

「アニエスが……？」

「ああ。それで起床を手伝うのも使い魔の役目とかなんとか……とにかく、朝の身支度ぐらいは手伝うよ」

アンリエッタは呆然と俺の言葉を聞いていたが、何を思ったのか「ありがとうございます」と躊躇いがちに口にする。そこに浮かぶ表情には、すでに寝顔のような可愛らしさを見る影を失っていた。代わりに映るのは王女としての凛々しい顔つきである。

「……それでは、お言葉に甘えさせてもらいます。クローゼットか

らドレスを取ってきてくださいまし」

「あいよ」

この部屋にあるクローゼットといったら一つ。俺は迷うことなく歩み寄り、「昨日私が出来ていたものと同じやつです」という背後からのアンリエッタの言葉を聞いてさっさとドレスを取り出した。

触り心地は物凄く良い。どこが良いと聞かれれば答えにくいのだが、凡人のキリトから見てもとにかく素晴らしい素材で作られていることは理解できる。

ふと疑問に思うと、自然と口は動いていた。

「このドレス、いくらぐらいすんの？」

「？ 値段ですか？」

「見た感じ良さげな雰囲気はあるけど……」

俺の突拍子もない質問に、アンリエッタは生真面目にも頭の中で何かを計算でもするように考え込み、しばらくしてぽつぽつと答えてくれた。

「そのドレスを用意したのは使用人ですから、詳しいことは分かりませんが……そうですね、大体300エキューぐらいかと」

言われて気付く。エキューってなんぞや。

おそらくは金の単位だろうが……そんな言い方聞いたことないぞ。やはり異世界は異世界ってことなのか？

その300エキューってのがどれほどの価値なのかは分からないが、王族である目の前の少女が着ているくらいなのだからやっぱり

馬鹿みたいな金額を叩き出していたりするのだろうか。

もしとんでも高額なら、新型の超スペックPC何台分ぐらいなのかな……。

「うーん……」

「？ どうしました？」

「へ？ あ、いや、なんでもない。ほらよ」

両手に持つドレスをアンリエッタに手渡し、手持ち無沙汰になった俺はとりあえず部屋の壁に背中を預けた。

それにしても……いくら相手が姫様だからって、お世話なんぞする必要あるのだろうか？

いや、今更な疑問なのだが。この世界では当たり前なのかもしれないし、俺も使い魔になったからにはそれなりの役目はあるのだから仕方ないと思うが……、今の時代総理大臣や天皇だって朝は自分で起きる。なんだか自分が無駄なことに体力を使っているようで微妙な気持ちだった。

「……？」

と、気付く。アンリエッタが未だ、ドレスを受け取った体勢から微動だにしていないことに。

それどころか俺のことをじっと睨んでいる。なんだってんだ。

「えっと、姫様？」

「……あなた、随分と鈍感ですね」

「はい？」

「レディーが着替えるというのですから、後ろを向くぐらいのことはしたらどうなんですか？」

顔を赤くして勢いのある声を飛ばしてくるアンリエッタ。

しかしそうだった。俺としたことが何という失態。というか現段階のネグリジエ姿が既に強烈なエロスを放っているため、てっきり『あなたのような平民、男とも思っていますせんわヨ！ オッホッホ！』みたいな感じでイメージを持たれているのかと思っていた。

根はやっぱ『女の子』なのだろう。

「あ、ああ。悪い悪い」

慌てて壁に向かって振り向く。……だがそれが失態だった。

なんで俺は部屋の外に出なかったんだろう。次の瞬間、背後から聞こえてくる微かな布のすれる音。

間違いない、着替えの音だ。いや当たり前だけど。ドレスを渡したんだし、本人が着替えるって言ったんだから当たり前だけど。今俺のすぐ背後で、大体似た年齢の、スタイルもそれなりに良好な女の子が生着替え中。

あえて言うが俺は男だ。男ゆえに、今この状況になんとも思わないわけがない。そりゃあ女の子が着替えている現場に居合わせるのかというエロゲみたいな展開に陥ったらそりゃあ少しはリビドーが刺激されるさ。それが普通ってもんだらう？

しゅ……しゅ……。

これはなんだ、生き地獄か！

俺に何をしろってんだ！

「……ん、キリトさん、もうよろしいですよ。……キリトさん？」

「……いや、なんでもないです、はい」

—— 一体どれほどの時間そうしていたのか分からないが、アンリエッタの声に恐る恐る振り向けば、彼女は昨日と同じ白いドレス姿でベットの从上から床に降り、ベッドの脇に置いてあった力チューシャを頭の上にセット。最後に紫色のマントを上から羽織る。してみれば、昨日とまったく同じ姿のアンリエッタがそこにいた。

「どうしました？ 顔を赤くして」

「男の神秘っす」

適当に答えて、思わず溜息。

まあ終わったことなので、これからは気をつけようと俺は心に強く誓った。

着替え終わったアンリエッタに連れられて、俺は城内の食堂へと足を踏み入れた。

なんでも朝食の時間らしい。それを聞いた俺は、不覚にも表情を輝かせてしまったのが自分でも理解できた。

この世界に来てからというものの、思い返せば一度たりとも食事を取っていなかったことに今更ながら気付く。SAOにいた時はあれほど旨いものを求めて食事ばかりしていたというのに、よっぽど自分の身の回りの整理だけで頭を使っしまいそこまで考えが及ばなかったのだろう。

そして思い出したら思い出したで目覚めたかのように腹の虫が鳴り出して、朝食と聞いたときはさすがのポーカーフェイスも喜びに染まってしまったさ。

だが、

「……姫、わたくしめの分は？」

「え？　ありませんけど」

朝食の代わりにカウンターのジャブを食らった俺は、顔面から血の気が引いてしまった。

無駄にだだっ広い、まるで宴会場でも思わせるような豪華な部屋の中央に置かれる縦長のテーブル。アンリエッタはそのド真ん前に座って、配膳係のメイドが持ってきた超豪華な料理（1人前）を礼儀正しく綺麗に食している。

反して俺はというと、旨そうな料理を目の前で見せ付けられ、ただ突っ立っていることしかできない。

……何なんだこの差は。

さっきのメイドめ、せめてパンの耳ぐらい置いてくってのが人の情ってもんだろ！

「……」

アンリエッタの持つナイフとフォークが小さく音を立てるのを耳にしながら、俺は恨めしげに彼女がありつく料理を睨みつける。サイドサラダとフォッカのようなパン。それと香ばしい匂いを漂わせるローストチキン。朝から豪華なもん食いやがって。

本来なら今すぐにでも目の前の料理を掻っ攫って全部食してやりたいところなのだが、まさか一国のお姫様相手に使い魔の分際でそのようなことをする訳にもいかず、俺はただ視線を注ぐことしか出

来ない。

羨ましい。

滅茶苦茶羨ましい。

さすがは人間の三大欲求の一つ。今まで様々なMMORPGを通して、高レベル装備のプレイヤーを見るたびに羨望を視線を送っていたが、現段階のこれは今までのそれを遥かに上回っていた。

と、その時。

——ぐうーびゅるびゅるびゅる……。

俺の意思に関係なく、突然自己主張しだす腹の虫。慌てて自身のお腹に手を添えるがすでに遅かったらしく、あまりにも情けない音に食事中のアンリエッタも怪訝な視線で振り向いてきた。

「……」

「……」

「……えっと」

「……」

「……お腹、空いてるのです?」

「……ッ、そ、そうだよ。そうだよそうですよ! 腹減ってるんだよ悪いか! だから俺をそんな哀れむような目で見るなよお!」

なんたる屈辱……朝食食えないだけでなぜこんなに精神的なダメージがでかいんだ……。

俺の情けない態度に呆れたのか、アンリエッタは困ったように溜息を吐く。

それから何か迷うように視線を彷徨わせると、しばらくして言っ

た。

「……そういえば昨日の晩も、あなた何も食べていませんでしたね」

「えっ、今更？ 色んな意味でグサツと来ただけだよ」

俺の鋭いツツコミを軽くスルーしたアンリエッタは、ふとテーブルの上に置かれる自分の朝食に視線を落とすと、手に持つナイフでローストチキンを半分に切り、その片切れを残り少ないパンの置かれた皿に移す。傍らに立つ俺に、そつとその皿を差し出してきた。

呆然と目の前に出される皿を見つめる俺。というかさつきからすぐにも飛び掛りたい思いでいっぱいなのだが、はて、これは一体……。

いつまで経っても動こうとしない俺を見かねたのか、それとも皿を持つ手が疲れたのか、アンリエッタの言葉が降りかかってきた。

「早く受け取ってくださいまし。お腹空いてるのでしょうか？」

「えっと……？」

「だから、召し上がってくださいな。私だって側近の使い魔が腹の音を響かせながら歩くのは勘弁ですもの」

呆れの視線をグサグサ突き刺しながら言い放つアンリエッタだが、それを聞いた瞬間、なんかどうでもよくなった。

しばらく呆然と突っ立ってしまいが、慌てて皿を受け取り、目の前の料理を見つめる。ゲーム内でも滅多に食わない豪華な肉料理に俺の中で期待が膨れ上がる。

「ほ、本当にいいの？」

思わず尋ねてしまうが、アンリエッタは小さく頷くだけですぐに自分の食事へと戻ってしまう。

そんな冷めた態度もなぜか今の俺には輝いて見えてしまった。そうか、これが天使か。

アンリエッタマジ天使！

俺は心の中で呪文のようにそれを唱え、同時に「いただきます」と呟くとさっそくその食事にあり付いた。

——異世界ハルケギニアに来て初の食事。無論、味は最高だった。

皿に付着する肉料理のソースをパンで拭いつつ、俺はふと思い立って改めて食堂の中を見回した。

無駄に広いスペースに、巨大なテーブル。天井にはこれまた巨大なシャンデリア。そんな中、黙々と食事を取る俺と我が主。

その光景を客観的に見てみると、もちろんながら一つの疑問が浮かび上がってくる。

俺は多少迷ったが、意を決して傍らのアンリエッタに言葉を向けた。

「姫様、飯はいつも一人で食ってるのか？」

「……？ どうしました、いきなり？」

「いや、ちょっと気になって。そういえばさっきから誰もこの部屋に入っていないなあって」

言った途端、微かに表情を歪める姫殿下。やべ、地雷踏んじやつた？

まあ、もしこの状況が元の世界で起きていたらただ単なるボツチ

なので、俺も空気を呼んで何も発言しなかったと思うが……まさか姫という立場でありながらバツちな訳あるまいし。

何か俺には分からないような理由でもあるのか？

「……別にいつもという訳ではありません。普段は母上や父上と共にします。ただ……、」

「ただ？」

「最近、父上は体調が悪く自身の部屋からほとんど動いていない状態。母上はその看病で手が離せず、おそらく食を取る時は父上の部屋でしょう。まともに動けるのは私だけですから……」

疲れ帯びた表情で淡々と語るアンリエッタ。なるほど、まあ妥協なところだろうか。

まさか家臣達が王族である彼女と同じ席で飯を食えるわけがないだろうし、結果的には毎日の食事を一人で取る事になるのだろう。アンリエッタの口ぶりからして、今最近始まったことじゃなさそうだ。おそらく今日まで、一人で食事を取ることが非常に多かったんだろうな。

「……」

なんだかそういうのは、嫌な気がした。

何が嫌なのかは言葉にし難いが、凄く嫌悪感を感じてしまう。アンリエッタへの同情か、哀れみかは分からないが……確かに俺はある彼女の状況に不快な感情を抱いてしまう。

何か俺にできることはないだろうか。

元々お人好しなせいで、俺は不意にもそんな風に思ってしまった。

「キリトさん、別にあなたが気に病む必要はありませんよ」

まるでその考えを呼んでいたかのように、アンリエッタは言う。

「そのようなことで悩んでいては国民の上に立つ者として堂々と胸が張れません。父上についても、あれだけ母上が真に看病しているのです。私は治ると信じています」

「……、そっか」

—— やっぱりこの子は強い。素直にそう思う。

ほんの十数年しか生きていないだろうに、彼女はすでに自分の道筋が見えているかのようだった。簡単なことのように、それは誰にでもできることじゃない。本当に努力して、本当に心が強い者じゃなければそれほどの決意は出来ないはずである。

だが俺は、感心すると同時にやはり哀れみの想いが芽生えてしまう。

たった十数年。されど十数年。普通そんな歳の女の子といたら、高校に通って、友達とだべって、勉強して、放課後の帰りに寄り道して、家に帰ったらメールで馬鹿話して……あくまでそれはキリトのいた日本での『当たり前』だが、似たようなものがこちらの世界にもあるのだろうか？

その当たり前が、彼女は出来ない。自分に重荷を背負わせるばかりで自分が楽になろうとは思えない。

お人好しな俺にはどうしてもそれが見逃せなくて……うん、こういう事をどうにかするのも、使い魔ってやつの仕事なんだよな？

俺は余っているパンを全て口に放り込む。しっかりと味わって飲み込むと、空いた皿をテーブルの上にゆっくりと置いた。

「—— ソロでの飯って結構キツイところあるよな。俺も昔は大変

だっ たよ」

「別に私は、そのようなこと——、」

「まっ、どっちにしろこれからは俺がいるけどさ」

俺がさらっとそんなことを言つてのけると、驚いたようにアンリエッタは振り向いた。

その困惑の表情へ向けて、俺はニヒルに笑つてみせる。自分でも不器用だと思つが、伝わつただろうか。

……やがてアンリエッタは表情を和らげて、小さく「ありがとう」と呟いた。

トリステインの王宮内には『資料室』というものがある。

何をするために作られたかは言うまでもないが、その部屋には昔から残る数多の情報誌や、娯楽から何まで全ての分野を揃えた無数の本、小説。他にも魔法のスペルが記載され、やりようによっては魔法を使役する際に魔力媒体となる書物まである。

とにかく何から何まで揃える資料室。そこを漁れば普通手に入らない情報だつてホイホイ蓄えることができる。

——私こと、アニエス・シュバリエ・ド・ミランはある目的のためにその部屋へと赴いていた。

普段なら絶対に足を踏み入れることのない領域。別に本が嫌いというわけではないが、元々ここに揃うものは魔法関連の物が非常に多い。はがない一人騎士でしかなく、魔法使いではないアニエスにとってあまり縁深い場所ではないのだ。

元よりア二エスは自分の特にならない事や無駄な事に時間を割けるほど暇な身分ではない。それこそ、一生を捧げると誓うアンリエツタ姫殿下のためでもない限りは。

そう、例え間接的でも姫様のためになるのであればここへ赴く理由も十分なのだが。

古臭い紙の匂いが漂う密室の一角。前方後方を本棚に挟まれる中、私はある一冊の本を手にしてページをめくり続けていた。

別に読んでいるわけではない。必要となる部分だけを探して、関係のないページはほぼ目を通していただけである。しつこいようだが、本一冊を丸々読破できているほど私は暇ではないのだ。

今私が手にしている本の内容は、簡潔に述べてしまえば『使い魔』に関する記述。特にコントラクト・サーヴァントによって契約した使い魔の紋章が図^{シン}によって一覧されており、ルーンの形によって発現される使い魔特有の能力が詳しく記されている。

なぜ私が使い魔の印なぞを調べているのか。

原因は姫様——いや、正確にはその使い魔として召喚された平民の男、キリトだ。

別にこれといって特別なところはない。目立つ容姿をしているわけでもない。どこにでもいそうな、本当に素朴なただの平民にしか見えない。本人ですら使い魔召喚されたことに動転しており、彼自身何か特別なものを秘めているわけでもないのだろう。

だが、果たして本当にそうなのだろうか。私は疑問に思う。

そもそも人間が使い魔として召喚されるという事例すら、今までまったく聴いたことがない現象だ。その時点でもう色々とおかしいというのに、さらに問題となるのは彼に刻まれた使い魔のルーン——黒い輝きを放っていた右肩の奇怪な文様である。

あまりにも珍しい形、あまりにも邪悪な輝き。姫様自身はあまりその事について気にしていない様子だったが、そのまま放って置いてもいいことなのか。そう聞かれれば、素直に頷ける事態でもない。

姫様の周辺整理を行うのも私の役目。雑務の大半は問題の中心人物であるキリトに任せているが、細かなところはやはり私が行うべき範疇だ。彼の肩に刻まれた謎のルーンを調べるため、そしてその正体を解明するため、私はこの資料室へと赴いていた。

……の、だが。

「……むう」

ぶっちゃけ、作業の進行は芳しくない。

ここに籠ってからかなりの時間本と向き合っているものの、それらしき情報は未だ手に入らない。一般に知られているルーンは全て調べつくし、記憶に留まるキリトのルーンと照らし合わせてみるがどうも一致する形が見つからないのだ。

まさかと思つて太古のルーン……それこそあの始祖ブリミルに深く関わるといわれる伝説上の使い魔についても分かる限りのことを調べてみたが、やはり形が重なるものは見つからなかった。

つまりキリトの持つあの黒い紋章は未確認紋章アシンクンルーンと考えるとところが妥協な線なのだが……さすがにそう決定付けるのは早計なものだろう。今の時代になつて新種の使い魔が現れるなどと、少し考え難いところもあるのだし。

そんな訳でもう一度確認のためルーン一覧の本を漁っているのだが、やはり現実には甘くないということか。結果は何度探しても同じだった。

——少し考え方を変えてみるか。

確かにあの少年は使い魔だが、そのルーンが一切見つからない。ならば『ただの使い魔』ではなく『珍しい使い魔』と考えを改めてみるべきだろうか。

無論その類はすでにある程度調べ済みだが、まさか伝説級の使い魔が始祖ブリミル関連だけではないだろう。他にも伝説に名を残してもおかしくないような、または残すことすら躊躇われるような使

い魔がいても別段変なわけではないはずだ。

「となると、この本は役に立たないか……」

手元で広げていたルーン書を閉じて、元あった本棚の一箇所へ戻す。

私は頭の中で必要な情報をピックアップすると、周囲を見回す。隅から隅へタイトルに視線を流していくと、ある一点で思わず動きを止めた。存外近くにあったそれを引き抜く。

どうもこれは多くの創造神話を取り上げた書物らしい。

実際にそれがあつたかはともかくとして、人々の間で知れ渡ってきたおとぎ話や空想上の物語をジャンルごとに纏め上げ、重要な点や似たような話との相違点が述べられている。現に本の初期から数ページは代表格とも言える始祖ブリミルのことで埋め尽くされていた。

私はしばらくその書物に視線を落とすと、目次の『使い魔関連』からページを参照しあるページまで本をめくる。丁度中間部分で手を止めると、そこにある文面へ向けて意識を落とした。

——創造者・マルドゥーク——

思わず眉間に皺が寄る。

この本自体が年代物のせい、運が悪いことに文字がかすれて文面のほとんどを読むことが出来なかったが、一部分に目を通してその創造者とやらが使い魔であつたことが理解できる。一体誰が担い手だったのか、どのような力を有していたのか、詳しいことは何一つ分からないがそれだけは明確としていた。

そして、ページの右端。

枠に囲まれて、かすれ気味ながらも一つの紋章がそこに載っていた。形だけしか残っていないそれをじっくりと眺めて、私は思わず

目を見開く。

それは、そこにある紋は確かに――、

「これは、まさか……」

キリトの持つ使い魔のルーンと、合致していた。

第3話 使い魔の役目（後書き）

今更ですが、少しだけオリジナルの設定を織り込ませてもらいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8285x/>

姫君の使い魔-Black Sword-

2011年11月12日17時09分発行